



### 本誌の特色

本誌は全國鐵道の停車場に備置  
 きあれば其廣告は全國の公衆一  
 般に知らるゝ便宜あり

東京市神田区鎌倉河岸

村上國信君

目次

篇 章	
一、	2、
二、	2、
八、	4、
八、	3、
十、	1、
十一、	

佛教の渡漢と遺龍の寫經

人道と佛道との關係

顯本したる忠君主義

安 心

佛教とは何ぞや

對外警策

日什置文諷誦章卷上

雜 報

梶木日種

本多日生

笹川真應

木村義明

山根顯道

古定賢正

板垣日桓

一、發心篇 感應

佛教の渡漢と遺龍の寫經

梶木日種

(1)

佛教が印度より支那に流傳し來つたのは、釋迦佛が印度に入滅せられて後ち一千一十五年、即ち像法の初の頃で、後漢の二代目の孝明皇帝の治世永平十年であつた（西曆紀元六十七年に當る）その傳來の次第を語ると、これより先き孝明皇帝がある夜の夢に、金色の人が身の長け一丈六尺、頂に日の光あり、胸に卍字ありて、宮殿の庭園に飛び來つたのを見られた、不思議に思召して翌る朝多くの臣僚に對し、その夢の物語をして何人であらうかと下問になると、太史といつて天文を考へ卜占を掌る役を勤めて居る處の傅毅といふ人が進み出て、「臣聞く西域に神ありその名を佛といふと、陛下の夢み給ふ所は、定めてこの佛ならん」と對へた、その時國子博士の王遵も「臣、周書異記を案ずるに、周の昭王二十六年甲寅四月八日に、聖人ありて西方に生れ給ふとあり、今陛下の夢み給ふ所これなるべし」と申上げた、明帝はさこそと思召されて、即ち定遠將軍の蔡愔、中郎將の秦景、博士の王遵等十人を使として西域に遣はし、佛道を訪ね求めさせられた、處が蔡愔等は幸に西印度に於て迦葉摩騰と竺法蘭といふ二人

の僧に出遇つたから、勅命を傳へて兩人に渡漢を懇請した、兩僧とも承諾して即ち佛陀の聖經を白馬に負はし、白巖に畫ける釋迦佛の像と佛舍利を奉じて洛陽に到着した（その時法蘭は國主が支那に赴くとを許さなかつたから、窺に脱れて摩騰よりは後に來たのである）そこで明帝は大に悦ばれ、勅して洛陽の城西、雍門の外に早速佛寺を建立せられ、佛像經典を白馬に駄して來たから、寺號を白馬寺と名けて、これに二人の僧を居住せしめられた、これが抑も支那に於ける伽藍の濫觴であつて、實に永平十年丁卯の事である、この年兩僧は勅命を奉じて、齎らしたる梵本の經典の中より、最も簡明にして且つ日常最も學佛者に切要なるものを撰み集めて漢文に翻譯した、その章段が四十二あるから、これを四十二章經と名けた、凡そ佛教の中には大乘、小乘、權教、實教などの區別があつて、その教義に勝劣淺深があるが、何分この時は佛法が始めて傳來した計であつて時機が未だ熟しないから、態と深遠高妙なる教理を顯し示さなかつたのである

かくて兩僧は洛陽に居つて佛教の傳弘に力を盡くし明帝はこれに歸依せらるゝから、在來道教を宣傳しつゝある所の道士は太だこれを悦ばなかつた、この頃は儒教は宗教として勢力がなかつたを以て永平十四年正月一日に朝廷へ拜賀に出る折を機會として、五嶽並に諸山の道士椿善信等七百餘人が上表して「西域より渡り來れる佛法は虚偽の教なり、試みに我が

道教とその徳を較べられたい」と申請した、兩僧は即ち「我が佛教は眞實の法なるが故に水火も壞ると能はず、宜しくこれを實驗せられたし」と申立てた、仍て明帝は尙書令の宋庠に勅して、正月十五日を以て白馬寺の南門に數多の道士を集らしめ、壇を築きて試みに双方の經書を焚かしむるととなつた道士等は各自家の奇經秘訣を盡く持ち來り道東の壇上に積み上げる、道西の七寶殿上には騰蘭が印度より持來りたる經像舍利を積み並べる、さてその準備完く整ひ彌月期日となつて双方共等しく檜檀の柴を以て燒き立てた、すると見る／＼内に道士の書籍は忽ち燒き盡されて灰燼となつたが、佛陀の經像等は其の盡儼然として残つて居る、一同不思議に思つてよく／＼檢べて見ると、卷物の軸は眞紅になり垂經の紙は黄色に變つて居る（この因由を以て佛經の事を黃卷赤軸といふのである、又この時左方に飾られたる佛法の教義が長じて靈驗があつたから、遂に左義長と稱へて吾朝に於ては正月十五日に疫氣を拂ふ儀式として爆竹の古例を傳へたといふ）その時太傳の張衍は積善信等の道士に向つて「汝等が書籍は今試みる所も驗なし、されば全く虚妄の法たるに決したり、敬みて西域の眞法に歸服せよ」と宣告した、彼等は今觀たり殊勝なるこの佛教の靈驗を見たら、最早争ふ所ではなく皆自から愧ぢて佛陀の威徳に感服した、中にも南博の道士費叔才等は慚愧の餘り感じて死んだ程である、この時佛舍利より光明

を放ち摩騰が神變を現はしたる神祕談もあるが今は畧して措く、法蘭は即ち法を説いて佛法の尊信すべきを論じた、そこで群衆は咸な一同に喜んで未曾有なりと稱嘆する、明帝は彌よ崇敬を加へられる、この靈威に打たれたる後宮の陰夫人等の一百九十人、司空たる劉善峻等の二百六十人、道士の呂慧通等の六百二十人、京都の張子尙等の三百九十一人（合計一千四百六十一人）は立所に發心して出家となり佛道を修行するととなつた、明帝は即ち城外七ヶ所に寺を遺立してこれ等の僧を入れ、城内に三ヶ寺を建て、尼衆を住はせ、皆咸く給施供養せられた、これより佛教が支那に興起するととなつたのである

以上の事實は佛教が始めて支那に傳來したる際、その靈驗に感動して發心したるもの、一例であるが、かくて追々と佛教が興隆するに隨つて、魏、晉、宋、齊、梁の五代の間に於て、佛教の中に大乘、小乘、實教、權教、顯教、密教と互に勝劣優降の論議が起り、南三北七と稱へて十流に派れ、各々闡釋の美を争つて居つたが、陳隋二代に當つて彼の有名な天台智者大師が奮然蹶起して、これ等紛亂錯雜せる佛教を快刀を以て亂麻を斷るが如くに剖判糾明せられたから、茲に復び佛教の光明を一天に輝かすが出來たのである、平たくいへば天台は一大佛教の中よりその根本實義たる法華經を撰み出して權實の起盡を明かにし、盛に述門法華の修行を鼓吹したの

である（曾て我が日本の佛教界が麻の如く亂れたる時に當つて、吾が日蓮聖人は佛勅を奉じて權實本迹の起盡を明かにし盛に顯本法華の大白法を宣揚して佛教の統一を唱道せられた彼の天台法華と此の日蓮法華とは各々その弘むる所の教法に於て優劣があり、その行法に難易があり、その他活動の状態等すべて霄壤の差違はあるが、只佛教革命の一事に至つては畢竟異曲同工である）爾來幾多の生民は佛陀の慈光に照されて蘇活した、それ等多くの感應の談柄は當時の史籍に傳へられて舊くより人口に膾炙せられてある、今その中で法華傳にある李遺龍の事を述べやう

李遺龍は并州の人で、その家は代々筆藝を以て著はれて居つた、彼の父は烏龍といつて道教の固まり信者で大の佛教嫌であつた、それ故に何人が頼み込んでも佛教とさへいへば一字一語も書かない、そういふ風であつたから臨終の際に遺龍に遺言していふには「汝は我が家に生れて我が筆道を繼いで居る、我れ死したる後我れに孝行を盡くさうと思ふならば、必ず我が志を承け繼いで佛教を書いてはならぬ、殊に法華經を書くとは宜しくない、その故は我が信ずる所の道教の本師老子は天尊である、我等は即ち天尊に教はるべき身である、然るに彼の法華經には唯我一人能爲救護と説き只釋迦佛一人して救ひ護るといふとは奇怪至極である、若し我が遺言に背き佛經を書く程ならば、我れ忽ち惡靈となつて必ず汝

の命を斷つや」といひ畢て舌八つに裂け頭七つに破れ五根より血を吐き苦み惱んで死んだのである、これは父が生前に佛教を誇りたる惡報として死して後ち無間地獄に墮つべき先相が今眼前に現はれたのであるが、子の遺龍はそんなとは思ひも寄らないから只管亡父の遺言を守つて佛經をば見向もしなかつた、かくて年月を送る内に、時の國王司馬氏が追善の爲めに佛教を書寫せしめたいといふので能書を尋ね求められると、名にし負ふ遺龍こゝ當時天下第一の能書であるといふので、早速彼れを召出されて法華經一部を書寫せよと命せられた、然るに彼れは亡父の遺言を守つて再三辭退申上げたから、止むを得ず他のものに書かせられるとなつたが、それでは何分満足が出來ない所から復び彼れを召出されて「汝は親の遺言を守つて朕が經を書かざるとは謂れなきとなれど孝行の志に感じて且く免し置きたり、しかし只御經の題目計りは書けよ」と三度まで勅定が下つた、されど彼れは尙ほ頑として御請をしないから王は大に憤つて云く「天地も尙ほ王の進退なり、然らば汝の親は即ち我が臣下にあらずや、今汝が一家の私を以て恣に公命を拒むと不屈至極なり、只題目計りは書けべし、若し尙ほ強て否むならば假令佛事の砌なればとて容捨せず直ちに汝が頸を刎ねん」と、彼れは進退維れ谷まり遂に泣く／＼勅命に従つて法華經八卷の題目を認めた、即ち妙法蓮華經卷第一、妙法蓮華經卷第二、乃至妙法

蓮華經卷第八と、この文字の数は僅かに六十四字であるが、これを書いた彼の心中の苦しさは實に千萬無量であつたのである、彼れは自宅に歸り大に歎いた、我れはこれまで少も親の遺言に違はずして随分孝行のものであつたが、今日計らずも王の嚴命通るゝに術なく心ならずも佛經を書いて不孝のものとなつた、天神も地祇も定めて瞋り給ひ不孝のものと思召すであらうと、天に慟き地に哭したのである

その夜の夢の中に大光明現はれ出て周邊まばゆく朝日かと思ふばかりにて、忽然として天人一人庭上に立つ、又數多の眷屬あり、この天人の頂上の虚空に六十四體の佛まします、遺龍愕き合掌して問ふて曰く「如何なる天人にて候や」天人答て曰く「我はこれ汝が父の烏龍である、佛法を謗りし故に舌八つに裂け頭七つに破れ五根より血を出して無間地獄に墮ちたのである、かの臨終の時の苦はとて／＼忍ぶとが出来なかつたが地獄の苦は却々るれにも彌増りて百千億倍である、いかにもしてこの事を汝に告げ知らせたくは思ひたれど遂に叶はずして年月を過ぎた、殊に臨終の時いたく汝を誡めて佛經を書く勿れと遺言したるとの悔しさは實にいふ計りなし、されど後悔先に立たず徒らに我が身を恨み舌を責めても更にその甲斐はなかつた、然るに圖らずも昨日の朝より法華經の始めの妙の一字が無間地獄の鼎の上に飛び來つて忽ち變じて金色の釋迦佛と化し給ふ、四八の妙相八十種好圓滿具

足して甚だ希有なり、この佛大音聲を出して説いて曰く假使遍法界、斷善諸衆生、一聞法華經、決定成菩提と、この文字の中より大雨を降らして無間地獄の炎を消した、閻魔王は冠を傾けて敬ひ給ふ、獄卒は杖を擲て立ち止まる、一切の罪人はいかなる事と周章狼狽いた、又法の一字飛び來つて前の如く奇瑞を現はし給ふ、又蓮又華又經かくの如く六十四字來つて六十四體の佛と成り給ふ、無間地獄に佛六十四體ましますれば日月が六十四天に出でたるが如し、天よりは甘露を降して罪人に與へられた、罪人共は餘りの不思議に只茫然として物をも得云はず惘れて居つたが、やう／＼にして口を開き佛に問ひ奉るやうは、さても／＼いかなる緣由あつてかかくまでも尊きとおはしまし候にやと、六十四佛答へての給ふやう、汝等決して怪むと勿れ、我等が金色のこの身は餘處より現はれ來れるにはあらず、これ正しく無間地獄の罪人烏龍が一子遺龍の手にて書ける法華經八卷の題目八六十四の文字なり、彼れ遺龍の手は即ち烏龍が生める身なれば書ける文字は烏龍が書けるものなるがよと、説かせられた、その時の嬉しさ如何ばかりぞや、幸に我れこの大善に因つて計らずも地獄の苦を脱れた、多くの罪人も亦救はれたのを悦んで悉く我が眷屬となり、今は皆共に切利天に昇る所であるが、先づ汝を拜む爲めにかくは此處に伴ない來つたのである」と語つたから、遺龍は夢の中に悦び身に餘り別れて後は何時の世

にか復び相見るとのあるやらんと思ひし親の形を見、佛をも拜み奉り嬉し涙に咽び入つた、その時六十四佛の仰に云く「我等は別の主なし、汝は我等が檀那なれば今日よりは汝を親として守護すべし、汝努め／＼怠ると勿れ、一期終らば必らず都率の内院に迎へ入るべし」と、彼れは實に恐懼に堪へず敬みて佛に向ひ奉り「自今以後は斷じて外典の文字等を書くべからず」と堅く誓言を立てたのである

さて夢覺めて彼れは具さにこの由を王に申上げると、王は大に悦ばれて「我が佛事は已に成就したり、汝上申の趣具さに願文に書くべし」と仰せられた、即ち彼れは謹みて勅命を奉じたのである

とてはないか、以上二箇の物語は孰れも像法時代といつて中世に於ける出來事であるが、今の世は純圓一實といつて純ら法華經本門の題目南無妙法蓮華經の五字七字のみが弘まる時代であつて、昔時よりは修行の方法が簡易でしかも勝れたる利益を得らるゝのであるから、幸に吾が顯本法華の信者となつて居る人々は喜び勇んで益すその信仰を勵げまねばならぬ、若し未だこの信仰に入らない人達は、自他の偏黨を捨て、能くこれ等の實験談を玩味し、一日も早く進んでこの眞正なる信仰の生活に入るが宜しい、さもなければ實に實の山に入りながら手を空ふるやうなもので悔いても返らぬ損害を蒙らねばならぬと云なるのである、吾が賢明なる兄弟姉妹よ、願くば猛省して後悔しないやうにせられたいものである

これは法華傳に載せられてある所の實験談であつて、聖祖日蓮上人もこの事を引いて信仰を勧められて居る、彼れ李遺龍は固より佛教を信じなかつた、のみならず自己の意志に反いて書いた所の法華經の靈驗は案外にも却て亡父を始め他の數多の罪惡あるもの苦を救ひ出だされて幸福にして快樂なる境界に導かれ、兼ねて王の佛事をも成就せしめたのである、彼はこの意外なる現象を見て實に驚喜せざるを得なかつた、果然彼れは大に感激して夢の中に於て正しく誓を立て遂に大法華經信者と成つたのである、これは獨り彼れ一人が發心した計ではない、彼よりも先きに己に靈感に打たれたる彼の父と無量の罪人が皆等しく發心したのである、なんと有難い

訓 聖

日は西より出る世月は地より出る時なりとも、佛の言慮しからずとこそ定めさせ給しが、此を以て思ふに慈父過去の聖靈、教主釋尊の御前にわたらせ給らん、檀那は又現世に大果報を招かん事疑あるべからず

(十五南無抄)

此曼陀羅を身に持ちぬれば王を武士の守るが如く子を親の愛するが如く、魚の水を憑むが如く、草木の雨を葉とするが如く、一切の佛神等のあつまり、晝夜に影の如く守り給ひ候、よく／＼御信用あるべし

(九妙心尼抄)

人道と佛道との關係

本多 日生

このたびは内外對と云ふ科題に就いて、御話することになり  
ました。この内外對と云ふは教相分別と申して、佛の教の  
上に顯はれたる淺深同異を心得る中の一つであつて、佛教と  
外の教との關係を辨ずるのであります。内外對と云ふことは  
佛教を内道と云ひ、その外の教を總べて外道と申すのであつ  
て、即ち佛教と佛教外の教とを相對して、その同異關係を明  
すのであります。

佛教の内道には大乘、小乗權教實教等の分別が分れて居りま  
すけれども、今は之を一つに見て、法華經の本意を以て佛教  
と定め、而して佛教外の教と比較するのであります。その佛  
教外の教と云ふものが又種々に岐れて居りますけれども、之  
を大別して二種に攝め、一は人間道德の教たる人道教と、一  
は人間已上の神を立て、人生已外の事をも教ふる宗教とを指  
すのであります。

この人道教と佛教との關係、他宗教と佛教との關係を辨ずる  
が、内外對と云ふ科題の精神であります。故にこの科題は詳  
しく辨明するには、なか／＼重大なる議論のあることであつ  
て、この關係を適當に會得すれば、立派な信仰の得らるゝ次

て、この二箇の大目的を果すに當り、一面に絶對上の問題に  
向つて解決を下すと同時に、直に人生の道義を奨勵するもの  
なれば、宗教は人道を指導すると共にそれ已上の信仰を興へ  
て、根底あり意義ある道義の奨勵をなすものであります。故  
に人道と宗教の一面とは、必ず合一すべきものであつて、そ  
の宗教の他面に於ける絶對上の解釋は、人道の側より可否す  
べき筈のものでない、但人道の履修と衝突するが如き宗教特  
殊の道德ある場合には、宗教問題としてその當否を解決すれ  
ば足れりと思ふ、例へば印度に於ける波羅門のカストの制度  
の如き、社會の平等を破り幸福を害するに至りては、釋迦  
牟尼の之を斷破せしが如くに、之を革新すべきである、又基  
督の教にして若しも忠孝の倫理を傷害するものとすれば、斷  
然その點を改善せしむべきである、猶佛教中に於ても人生を  
蔑視して人道の發揚を妨ぐるが如き方面は、之を宣布せしむ  
べきにあらず、斯くして宗教の見解が人生の道義と衝突し若  
しくは傷害するが如き場合には、改善せざれば宣布せしむべ  
きてない、之に反して人道を以て宗教の善良なる感化に反對  
して、狭劣なる思想を鼓吹するが如きことも、大に之を諷め  
なければならぬ。

この人道のことを佛教では世戒と云ひ俗諦門と稱してありま  
すが、佛陀は優婆塞戒經に於て世戒と第一義戒(佛道)との接  
合を教へ給ひて、五戒即ち當時の人道の上に解脱の大道を加

第2ありませす

先づ人道教と佛教との關係に就いて大體を辯じようならば、  
人道教に於ては絶對上の問題に向つては可否とも語らない  
て、但人生必須の道德を實行することを奨勵するのでありま  
す、即ち吾人は如何にして生じ來りしか、その本体は如何な  
るものぞ、又死後果して消滅に歸するや否や、天地の間には  
人間已上の神格を有するものありや否や、萬有は如何にして  
存在せるか、吾人の視聽已外に優勝なる生活をなす者悲惨な  
る境界に沈める者ありや否や等の、絶對上の問題に向つては  
何等解決を與ふるなくして、これ等の問題は未定の間に放擲  
し置き、而して人生上の必須する道義、即ち父母に對する孝  
道、君主に對する忠誠、同胞に對する博愛、相互間の信義、  
自由、責任等を、最も嚴格に履修せしめようと教ふるのであ  
る、斯くの如く絶對上の深遠なる問題に對する解決を有せざ  
る所はありますけれども、人生必須の道德を奨勵しますから、  
その根底は淺くとも意義は弱くとも、實際上に於て多大の効  
果を示し、又迂遠にして空想に耽るの弊がありませんから、  
この人道教は今尚大勢力を有して、時に宗教の領分にまで立  
入りて、反抗的態度を取る者すら生ずるのであります。  
宗教の本領は今更申すまでもなく、人生の幸福を保護し、且  
未來永遠の大果報をも併せて獲得せしめんとするものであつ

へ給ひたのである、この經は佛教入門の初歩を示したもので  
あるが、既に斯くの如く世戒たる人道と第一義戒たる佛道と  
の接合を教へ、而して世戒たる人道のみに依る道義は、彩色  
に膠なきが如しと説き給ひて、根底と意義とに缺くる所あり  
て、その實行相續の力弱き所以を示されて居る、又法華經に  
至りては俗諦開會の妙旨を教へ給ひたのであります。俗諦  
開會と申すは俗諦と云ふは即ち人道であつて、開會と云ふは  
この俗諦たる人道に根本の意義を光顯するのである、それは  
俗諦たる人道のみにては吾人の生因も、本體も、未來も、因  
果の律法も何等説明することが出来ないから、これ等の意義  
を明にして而して人道道義の實行に意義を興へ、その道義の  
徳は現在に身を修め、家を齊へ、國を治め、天下を平かにす  
るの效果あるに止まらず、實に之に由つて自己の本體は永遠  
不滅の妙躰を顯現して、常住涅槃の境界に逍遙するを得ん、  
されば犧牲の地に立つものも、單なる犧牲にあらずして後に  
大果報を獲得すべく、こゝに人生に於ける短生涯の苦樂得失  
を以て、意思を左右せらるゝことなく、超然として善を勵み  
義を行へば、最後の勝利は必ず我に歸すべきを確信するに至  
るのである、この俗諦開會の妙教に由つて自己が道義の實行  
に一大活力を得るのみならず、この道義の精神が非常に崇  
高する觀念にまで進み行くのである、即ち父母の孝養も單に  
肉体にのみ止まらずして、その精神的慰安より進んで永遠の

本体をも救はんとするに至り、妻子に對しても同胞に對しても、永遠の救済を理想すると同時に、それ等の人々にも不徳不善の人としてこの世を終るが如き事なからしめんとして、社會全般に向つて道德的生活宗教的生活に入らんことを欲求し、かゝる大道念の上に人道を扶殖するに至るのである。前來述べたる如く、佛教は人道を保護して之に根本の意義を與ふる廣大なる宗教なれば、人道の一面に止まりて佛教に反抗するが如き稱劣なる態度は取べきでない、故に法華經には若し俗間の經書治世の語言資生の業等を説かんと皆正法に順せん

と説き給ひたのである、この文に俗間の經書とは人道を教ふる經典を指すので、治世語言とは政治法律なり、資生業等とは生活を資くる業務は悉く之を包括せり、されば人道にもあれ、政治にもあれ、生活の業務にもあれ、その事直に佛法の妙旨に契合して、現在の幸福を保障し、未來の解脱を獲得する力ありとなすのである、但し偏狹なる人道説に泥著してこの高遠なる妙教に接觸せざる時は、之を警告せねばならぬ、故に法華經の他面には左の如く説けり

其の人復餘經を志求せず、亦未だ曾て外道の典籍を念せず、是の如き人に乃ち爲に説くべし (譬喻品)  
 諸の外道梵志尼健子等及世俗の文筆讀誦の外書を造る及び路伽耶陀逆路伽耶陀の者に親近せざれ (安樂行品)

八、行法篇 道義 六、忠君

顯本したる忠君主義

笹川真應

人類生活に於て幸福を増進し、束縛を受ず自由に活動し、限りなく快樂たいは、人類すべての望む所て、誰もこれには異議のあろう筈はないが、さて左様うまく問屋の卸さないは人類生活の面目である、

節制なき自由は放縱に流れ、惡道に墮落し、永遠、浮ぶ瀬がない、これが爲め本來我等の有する靈火は、反て妄火となり煩惱の餘は我身を燒が如き、痛苦を感ずる、宗教は之を救濟せんとして、世に必要視せらるゝものである、さりながら宗教の物の良否は直にこの問題に、刺撃を與へるから、大に注意を拂はなければならぬ、所謂迷信は病をして、一層重患からしむることになる、正義の光明はよく此の闇を照破し、人道の發展はよく人類をして、その所歸を得せしむ、正義の光明人道の發展、これ何によりて現實ならしむるか、これを道義問題とせんか、道義の源泉は素より宗教であるが、從來、世間にては道義を解決するに就て、佛教基督教儒教神道、又は倫理學に根底を置いて論ずるも、之を總合して謂へば、道義の解決は宗教によるか、倫理學によるかの、二途に歸するの外ない、今宗教倫理の關係に就ては、多岐議論もあるが

この譬喻品の文は五雙に善人に相を明す中の第三内外一雙の文にして、法華經の妙教を侮蔑する思想ある偏狹者を誡め給ひしもの、又安樂行品の文は邪人に遠かることを明す文にして、梵志とは波羅門なり、尼健子とは出家者の外道なり、路伽耶は此に惡論とも破論とも譯す、世尊の妙教を破ふる惡論を吐く者、逆路とは師主君父に逆ふの邪論者なり、斯かる外道の人と文學にのみ泥みて崇高なる宗教の信念に進まざるものを誡め給ひたのである、又天台の止觀に人道の偏狹者を誡め給へる文あり

人を下し他を輕しめ己を珍とす、鶏の高く飛んで下視するが如く、而も外には仁義禮智信を掲げて、下品の善心を起し阿修羅道を行するなり  
 斯くの如き人々は固より人道の本分すら知らざる者なるべけれど、往々斯くの如き道學者の今猶村落邊隅の地に跼からざれば、引いて以て之を誡むるのである  
 之に就いても宗教者は冥福の思想のみを偏崇して、淫祠迷信を勤めたり、又は單に未來觀に偏傾して、現在必須の感化を怠るが如きことは、返す返すも誠めなければならぬ、斯くて人道と佛道とは適當なる冥合融會を得て、世道人心の裨益を大切と心懸けたきものである、是れが佛陀の聖旨であつて、又人としての本分である  
 已上内外對の中に於て人道と佛教との關係を述べましたが、この次には他宗教と佛教との關係を語ることに致します

畢竟、宗教は精神全體の支配權を有するもので、倫理は外部に現はれたる意志の發動を約束するものである、更に語を進めて謂へば、宗教は目的を指定しある偉人の命令を奉じ、倫理は人と人との關係を行ふものである、宗教は絕對善で、倫理は相對善である、人倫五常の規定に基き、君に忠義を竭し親に孝行をなし、兄弟友愛に、夫婦和合せよとは、所謂相對善であります、如何なる教をうけて、人倫五常の行爲が遺憾なく、遂らるゝか、この精神の發動は、絕對善たる宗教に依ざれば不可能なる、則ち宗教と倫理は離るべからざる關係を有しておる、なれど倫理學は外部の行動を、約束するものなるが故に、「人類の幸福を増進せよ」「至善に止まれ」「自己の品德を明かにせよ」斯の如く唱道するも、その己上に向ひこれを得るの、表示がない、これ倫理學の欠點で、知らず識らず宗教の領域に入りこむ事になる、倫理學者の泰斗ともいふべき、ヘーゲル、カントの人たちも宗教より發動したる、倫理論に根底を置きしは、即ち宗教は倫理の根源なることを立證したるものである、然しながら、宗教教義の如何は直にその感化に及ぼし、人倫五常の行爲に反動を與ふることは、何れの歴史にもありありと見へる、殊に歐洲歴史の慘酷没人道なるは、基督教感化の結果であるとせば大に寒心すべきことではないか、  
 我が大日本帝國は、建國の始より人倫五常の道、正しく國

民品性の崇高なることは、此の國土の風光秀麗と共に、世界に誇稱するにも拘らず、中古、名教思想の破壊は、相對的人道に大變態を來たし、臣は君を侮蔑し、子は親を殺し、婦は淫縱に流され、その實狀その發行、獸畜と簡ふことの、出來ない時代がありました。保元以後の歴史は、實にこのパノラマである、さらに北條義時に到ては、後鳥羽土御門順徳の三帝を、遠く海洋の孤島に遷し奉り、己れ不忠不義の榮花に耽りても誰れ一人、怪むものがない、これ内に至誠の信念なきがため、外に現はる行為に斯かる醜劇を演ずることになる、宗教の良否とその感化の結果は、大に意を留むべき問題である、人倫の道に大變態を演じたる、當時の宗教は外面は形骸を保ちて存立せるも、精神は既に死し、權威もなければ信條の命令も行はれない、止むなく陰忍の手段と無法の壓力を加へることになる、中古、天主教即ち羅馬教はこの陰忍と壓力を敢行した、我國にても天台真言及び南都の僧徒は、慈悲の行相を捨てて兵事を常職とし、陰忍壓力を敢行し、甚しきに臻ては、武力を以て君に反抗するが如き、暴逆の罪惡を求めました、斯かる時代の歴史には、正義の光明もなければ、人道の發展もない、國家を治むるもこれと同じく、國民をしてその善政善術に心服せしめず、陰忍壓力を以て服従させるもそれはホンの一時の服従で最後に恐るべき反動の導火となる、いま一例を擧げて謂へば、日蓮聖人に對し、北條氏が陰忍の

手段と無法の壓力を加へ、聖人をして「日蓮は此國土に生れたれば、國の爲め君のため萬民のために安堵を謀るも、陰忍壓力を以て、日蓮の主義を防がんとするも徒勞に歸するの外なし、日蓮は一身の安堵を圖るものにあらず、日蓮の一身は佛道に捧げたるものなり」と連懷られたるも、正義は最後の勝利者で、聖人が受けたる迫害は、正義の光明となり人道の發展となり、末法萬年の闇を照らし人類救済の源泉となりました、されば人倫五常の相對善は、宗教の至誠信念によりて整足し、宗教の良否はその結果に大なる指得あることを會得せられたであらう、いてや、これより道義部門の一條目たる忠君に就て卑見を述べん。

荷も國家を形成り、その國體が帝王君主の制めなれば、君に忠義を竭すといふ觀念がなければならぬが、そこが宗教感化の岐る、所て、耶蘇教を信ずる國民は、外面上政治に服従し君主に敬禮するが、神に對する概念よりせば、その君主が耶蘇教を奉じこれを保護する點より敬愛することになる、若しその君主が耶蘇教を放擲せば、惡魔として直に反對をする、且各國の君主は、優勝劣敗の結果によりて君主權を取得したるものなれば、その國民に忠君の觀念がない、我が日本帝國は世界無比の國體を有す、殊に建國の始に於て既に同族結合の美風を現はし、皇室は國民の宗家にして、萬世業れず

君臨して臣民を愛撫し給ひ、國民はその所を得て、上に對しては義勇奉公の誠を効し、父子兄弟親睦、夫婦相和し、相對的人道の行為を充分に發揮するは、國體の精華にして、建國の精神は正義の光明となり、忠君主義は人道の發展となり、徳の流るゝ所、世界の平和人類の幸福を増進するの結果を見ることになり、建國の精神は三種の神器によりて表示せられ、然してこの表示は、皇太神の慈悲の發現なることは、普ねく國民の信ずる所ならん、この尊ぶべき慈悲の發現は、その本源法華經にありと吾人は想ひます、法華經は釋迦牟尼佛の説法にして、日本に到來せしは佛敎傳來の後なりとの、皮相の觀察よりせば、皇太神が慈悲の發現は法華經なりとの吾人の説は、奇矯の如くなれども、法華經敎義の内容より觀れば吾人の説は道理あるものと信せられます、法華經は佛敎經典の眞髓で、宇宙を包含してある、法華經は釋迦牟尼佛が慈悲の發現で、この慈悲は宇宙を包含してある、法華經は佛陀常住の活動を顯示した經典である、法華經は釋迦牟尼佛が本佛常住の中心によりて、宇宙常住と慈悲の活動が普遍なることを示し、これと同時に過去未來法華經の常住なることを明かにしたものである、法華經壽量品に云く

「諸の善男子如來演る所の經典は、皆衆生を度脱せんがためなり、或は己身を説き或は他身を説き、或は己身を示し或は他身を示し、或は己事を示し或は他事を示す、」

これ、釋迦牟尼佛が慈悲の活動と、その普遍救済の神通を説明せられたものである、皇太神が慈悲の發現もこれに基き、建國の精神も本佛が事智悲即ち身口意の三輪より發動したるものである、この因縁の神秘は古來識者の認むる所て、須梨耶蘇摩の如きは此經緯東北にありといひ、天台の如きは佛陀普遍活動の神秘を、和光同塵といひ、聖徳太子の如きは國家安寧の本源を佛敎に置き、建國の精神を發揮せんとして、憲法を作りうが憲法の基礎を佛敎殊に法華經に採れた、傳敎大師も一乘圓頓の戒壇を建立し、法華經を鎮護國家の寶典とし日本國を寂光淨土の理想國土ならしめんとせられしも、慈覺智證の輩、この神秘の妙事を見るの明なく、眞言の邪法にかふれたるの結果は、相對的人道に大變態を來たし、醜狀視るに忍びざる保元前後の、パノラマとなり、國民苦悶に咽ぶにつれて、念佛禪宗等の大義顛倒の、宗旨を歡迎することにあり、建國の精神は次第に沮喪り、永き年月一日も安らうなく、國民は兵火の塗炭に苦しめられた、北條氏大義名分を顛倒せる時に方り、顯本の旗幟を立て、救世の使命を果さんとせられたるは日蓮聖人でありませぬ。

日蓮聖人は本佛の使命により、宇宙包含の法華經により、一切衆生を救済せんとの理想を抱かれたり、本佛は一切衆生のために、常恒に大慈悲を垂れ給ひ、日蓮は一切衆生一切の苦は、悉くこれ日蓮一人の苦なりとの抱負より推論ば、大

雲の普ねく一切をおふが如く、宇宙全體を救済するが日蓮聖人の冀望なれども、この國土にねける、妙事の因縁より、普遍的教義を國家的思想に調和し、この國土を寂光の本國土と理想し、この國民が建國の精神は、宇宙統一すべき神祕の因縁を具有することを、顯本の教義によりて、日本國民の本領を顯されたのである、正義の光明人道の發展は、名實紛亂せる邪教を排斥するにあらざれば、實現することが出来ない、正法を立て國家を安穩ならしむ、日蓮聖人の理想は、立正安國論と表はれて、對國家の要術となり、邪法邪師の教を捨て教理の名實を信得せよとの訓示は、盲目を開く救済の要義となり、茲に始めて至誠の信念が確立するにあらざれば、相對的人道の行爲に大變態を來たし、國家を殆ふからしむるものと斷定し、國家の不幸は世界の不幸となる、即ち國家部分の説明によりて、世界普遍の説明を圓滿にせられました、立正安國論に曰く、

「汝早く信仰の寸心を改めて、速に實乗の一善に歸せよ、然れば則ち三界は皆佛國なり、佛國を我れ我れへんや、十方は悉く寶土なり、寶土何んぞ壞れんや、國に衰微なく土に破壊なくんば、身はこれ安全にして、心は此れ禪定ならん」

實乗の一善とは、良宗教の絕對善をいひ、佛國寶土は人道の發展せる結果をいふにあらざして何んぞ、根底なき訓誡説示

八行法篇 3 安心

安心

木村義明

安心とは何ぞ

安は止なり定なりと云ふて、やすらかに止まり、靜かに定て居る形状である、我々のビタリと坐た處を安坐と云ひ、天子様の御立寄り遊れたる處を行在所と云ひ、佛様を御祭り申すを安置し奉ると云ふ。又た安は安穩、安泰、安全、安樂、安慰など云ふて、凡て危険の無い、心配のない、畏るゝ處のない工合を安と云ふので、「やさき」形状である。安心（あんしん）と云ふても宜しいのであるが、佛教從來の言語に隨てあんにん（あんにん）と云ふことにします（とは、心をやすらかに止め、靜かに定め、確實と落着けて、少しも動かさない状態でありまして、たとひ鎗が降ふが、鐵砲玉が飛て來やうが、火事に成ふが、地震が揺れやうが、生命が無くならんが、地獄へ墮ちやうが、ピクともせず居る状態を安心と云ふのである。と云ふたきりならば、夫れは自暴自棄で、惡大膽なつたのだと云ふものがあらふ、夫れは尤もな話で、此が安心と自暴自棄との間違ひ易ひ所なので、恰ど吝嗇と儉約との間違ひ易ひやうなものである、種々の罪惡や、災難の爲めに苦み、煩ひ、悶へたる結果、とうとう正しき心を持ちされずして、如何成

は、虎を描て猫に類し、龍を畫て蛇に類すると同じく、その神韻が發揮しない、建國の精神は顯本の教義によりて、その本質が發揮せられ相對的人道の行爲も名實相應することが出来る、建國の精神は慈悲の活動慈悲の權化であるとせば、忠實に働くといふことが人類の任務で、とりわけ、日本國民はこれを實行せざればなるない、人倫五常の道は、すべて履むべきは謂ふまでもないが、君に對すれば忠となり、親に對すれば孝となり、長上に對すれば敬となる、これ人と人に對して、約束となる、而して忠君思想は、人道發展の原動力で、絕對善の至誠信念の現實は、人道中心の忠君思想に適合するである、忠君思想は人類一般に對し、忠實となり、博愛となり、人類の眞美善を遺憾なく發揮する、所謂忠君は人類節義の最要である、これ顯本の教理を信するにあらざれば、その本領を發揮することが出来ません、顯本の教義は、上來、詳らかに述ぶるが如く、普遍的宗教美を國家善治の單位に應じ國家善治の美を宇宙救済の本位に準じ、以て宇宙統一すべき本佛の大慈悲を包含し、これが正義の光明となり、皇太神の慈悲の發現となり、建國の精神と現はれ、人類生活の幸福は節制ある人道を踏み、その結果は無限自由の快樂をうけ、人生の目的を到達することが出来る、忠君思想は實に人道發展の素である忠君思想は人類の本領を顯はしたるものである、これを顯本したる忠君主義であると思ひます。

てもかまわぬと云ふのが自暴自棄で所謂毒風主義となるのである。夫れから、惡ひ事のみを考へ、惡事計りをしたがり惡ひ事柄には誠に氣の強ひ人がある、而して如何な慘酷な事でも、平氣でやる者がある、是云ふのは安心があつて、心が坐て居ると云ふ譯ではない、毒風主義を一等昇たもので、惡大膽成たと云ふのである、これらは惡に強ひのである。今此で安心と云ふのは、善に強ひ方を云ふので、佛様の御慈悲を信じ、御力を頼むところよりして、善事を爲ることに於ては、如何なる災難に出逢ふとも、如何なる窮困に陥入ふとも未來の果報を樂み、現在自己の心に少しも疚しき處のないのを安心と云ふのである、佛様は、此心を「畏るゝ所無き心」と仰り、日蓮聖人は「後生に大益を得べければ大に悦ばし」と教へ下さつた。要するに安心とは、因果の道理を信じて、善因善果、惡因惡果の關係を辨へ、佛様の御力を頼みて、少しも善ひ事を爲すには、少しも危険を感せず、心配をせず、畏るゝ處なく、常に心を安穩にし、安泰にし、安全にし、安樂にし、而して安慰を得るを、之を眞實の安心と云ふのである。更に具體的に云へば、子供が母の懷に乳房をつかまへてをるありさまである。以上は、安心の定義を述べたのであるが、如何も我々の社會は此の定義通りに行かぬ、詮り社會は理屈詰にはならない、此通りに理屈が判て居ながら、



我々は何故に安心し能はざるか  
實に不思議でならない。が然し、此には種々原因があるので  
理屈丈で安心の出来ないのは、無理もない事柄があるのであ  
る。

第一は、社會の事がまゝにならぬより起る不安心で、一人間萬  
事塞翁が馬」とやらで、仲々思ふ様にならぬ、元來人間が社  
會の事を、一切自由に仕様と思ふのがそも、間違た考へな  
ので、是と云ふのも、煩惱が餘り劇ひからである、欲から起  
る業である。自分も煩惱欲業が劇ひ、幾程取ても足りない  
人も煩惱欲業が劇ひ、幾程持て居ても満足しない、満足し  
ないから、更にモット欲張る、一生懸命に勞働する、限りあ  
る品物を、限らない欲望で競争するから、遂に失敗者が出来  
る、苦む、恨む、嫉む、自暴自棄になる、夫でも成功者の方  
は、まだ足りないといふ顔付である、愈々競争は劇しく成て  
喧嘩、詐欺、陥、擄、盜、殺、人と云ふ様な非常手段に  
訴る。斯なると成功者も、必ずしも百年迄も成功者ではな  
い、失敗者も、いつまでも失敗者でなく、何時か又た成功す  
ることもある、七顛八起である。斯様に社會は競争と、衝突  
と、煩悶との走馬燈であつて、欲望と云ふ煩惱が心に成て、  
クル／＼走り廻て居るものである。我々の社會は、自分々々  
の心柄とは云ひながら、斯云ふ恐ひものが、始終廻り當て  
來るのであるから、少しも安心して居ることは出来ない、危

を研究せねばなるまい。今ま拙者の研究を申上れば、凡そ三  
つの安心し得らるゝ方法があります。

第一は、衝突と災難を豫防することである。此は劇しき競争  
を爲ぬとか、失敗者を助けるとか、衛生に注意するとか、家  
屋の構造を堅固にするとか、消防機械を準備するとか、警察  
制度を完備するとか、法律を嚴重にするとか、教育を盛に普  
及するとか、社會の改善を計るとか、富國強兵を計るとか、  
其他金を溜めるとか、一生懸命に働くとか、學術を進歩させ  
るとか、種々の仕事はあらふけれども、要するに是等は、皆  
な、人々相互の衝突を避ける爲めと、遇然の災難を豫防して  
成るべく、此の世中に危険の少ない様にとの下心である、而  
して安心して世の中を暮そうと思ふのである。是が第一の方  
法であつて、一般の人のやつて居ることは皆な此の方法であ  
る。現に我々も此方法に賛成もし、且つ主張して居るのであ  
る、けれども此方法は甚だ不完全で、徹頭徹尾、社會の平  
和を保ち、危険を無くすることが出来ない、一時一寸の安心  
は出来るけれども、永遠の安心を保つことが出来ない。現  
に今日の社會が、文明が進み、學術が発達して汽車、汽船、  
電信、電話は申すに及ばず、教育は盛になる、法律は漸次に  
増る、警察の手は能く廻ると云ふにも拘らず、少しも安心し  
て居られないではないか、危険いことは愈々増すばかりで  
ある。

險極るのである。

第二には、遇然の災難である、是が又た不安心なもので、何  
時來るか判らない。我々は競争に勝て、立派な成功者となり  
又た此後少しも失敗しないとして見ても、何時火事に焼かれ  
るか知れない、何時地震に壓されるか知れない、何時病氣  
に成るか知れない、何時流行病に斃されるやら判らない、社  
會は何時如何なる事件が起るか判らない、幾ら金が在ても、  
位が高くて、遇然の災難計りは遁ることは出来ない、是が  
我々が安心の出来ない、第二の理由である。  
第三が、死後の不安心である、我々が死んだら、地獄へ行て  
あらふか、極樂へ行てあらふか、又た地獄極樂はあるもの  
であらふか、無いものであらふか、あるならば如何な様子で  
あらふか、無ならば我々は如何なるであらふか。現在の惡業  
煩惱より推し計て見れば、未來は如何も薄危險がわるい、縱  
しや惡業煩惱の結果が無として見ても、死んだら暗の世で、  
さつぱり譯が判からない、是が我々が現在に於て不安心な  
る、第三の理由である。  
以上の三つの事由の爲めに、我々は夜も晝も安心が出来ずに  
苦て居るのである。然しながら、我々は如何にもならない  
からと云ふて、此儘では居られない、我々の良心は、如何し  
ても安心を求めて止まない、然らば我々は、  
如何にせば安心し得らるゝか

此に於て或者は、學問智識の理解力に依て安心を企てやうと  
する、是が第二の方法である。哲學と云ふ六ヶ敷の學問をし  
て、宇宙の眞理とやらを研究して、大學者と成り、佛様の様  
な大智慧者と成て、社會の眞相を遠觀して、然して妄想の爲  
めに騙け廻て居る我々よりも、モット離れた所に座を占めて  
下界を冷かに見下し、人生が何だの、宇宙が何だの、此が哲  
學の眞理であるのと、獨り合點て安心を爲やうとするのであ  
る。けれども、是も同じく長續が出来ないので、漸々研究に  
研究を重ね行くと、仕舞には哲學の眞理の頂上が判らなく  
成て來る。何のことはない、恰も、夜近道を行ふとして、露  
路を抜けやうとすると、合惡行きどまりて黒塚に突き當り、  
鼻の頭を眞黒にした様なものであつて、行先は判らなく成る  
のである、寧ろのこと、少し位ひ遠くとも、普通の道を行けば  
宜かつたと思ふ位で、さうなると六ヶ敷の哲學なやを研究し  
て、腦病に成るよりも、働いて金をもうけて、美味ものでも  
食ふ方が餘程氣がさいて居る様にも思はれて來る、今迄磨上  
げた學問も、智慧も、何の役に立たぬ様にも感じられ、今迄  
の勉強も本の空阿彌と成て、愈々煩悶は増して來る、寧ろのこと  
始より學問もないならば、ボンヤリして居て左程苦に成らぬ  
かも知れないに、生なか學問して智慧があるだけ、神經質に  
成て居るから、却て煩悶の度が強ひ位で、少しも安心とか、  
落着くとかは出来ない、して見ると學問があるからと云ふて

智慧があるからと云ふて、安心の爲めにはあてにならぬものである。

然らば、第三の安心法は何ぞと云へば、此は宗教の力に依て安心する方法である。此は佛様の大慈悲を信じ、佛様の大救済を信じ、佛様の大神通を信じて、我々の身分行動を委託して仕舞ふのである。「苦しい時の神頼み」と云ふことがあるけれども、我々は始終苦しいので、自ら救ふことが出来ないから、何でも斯くも、佛様に委任するより仕方がないのである。我々が佛様の大慈悲、大救済、大神通を信じられなければ仕方がない、夫れ限であるが、信じられる以上、信じなければならぬ以上、信じたくて信じたくて仕方がない以上は、我々は何時か、此の危険な社会に對する活路を見出して、漸く安心することが出来るのである。元來、第一の、衝突と災難の豫防を幾ら爲しても、豫防爲しきれずして、安心の出来ないのも第二の、如何程智慧を磨き、如何程哲學の眞理を究はめても安心の出来ないのも、宗教信仰と云ふ土臺がないからである。佛の慈悲を信じ、救済を信じて居るならば、我々は此社会にて、如何に失敗し、如何に罪惡を造つても、如何に愚痴であつても、最後は必ず救済されると云ふことが、チャンと決定して、然して夫が能く判て居るからして、少しも狼狽へずに、安心して居られるのである。誰が何と云ふが、社会に何な事件が起らふが、天地が覆りかへらうが、佛様が我々を救済して下さることは間違ないことである、動かざる眞理である。日蓮上人は、「たとひ日は西より出るとも、月は缺けぬことありとも、潮のみちひぬことありとも」と仰つた、我々の安心は、此に於て始めて決定するのである。要するに、佛様の我々に對する大慈悲、大救済、大神通を信するに依て、安心が出来るのである。言を換て云へば、宗教の信仰に依て安心するのである、我々は此信仰と安心とが決定した上に於て、社会の衝突を避ける方法や、災難の豫防法を講ずることや、哲學や、科學の研究を重ねて、愈智識を磨くならば、夫れこそ立派な人格を得られるであらふと思ふ。日蓮上人は、「法華修行の安心を企てよ」と仰たは斯云ふ安心法であらふと思ふ、此の安心は一時一寸の安心でなくして、未來永遠の安心法である。以上の話で、我々が安心し得る方法は、大畧判たが、更に我々が、

安心したる心的状態

は、如何工合かと調べて見ますと、仲々面白ひ。第一佛様の慈悲が判り、大神通が判り、大救済が判つて、我々の身の行末、落着き所がはつきりと見える様に成ると、何だか世の中が大變廣く成た様にも見え、人々が大騒ぎやつて大事がることも、自分にはつまらない事の様に見える、人々が苦しいとか悲しいと思ふて居ることも、自分には何んでもない様に思はれ、人々が如何したら善からふかと、非常に心配に成ること

も、自分には何でもなく、直に自分の爲すべき事が判り、人がコセくしても、自分は悠然として居られ、人々が如何に怒つても、愚痴をこぼしても、自分は平然として居られる様に成るもので、中庸(だと思つた)と云ふ書物に、「心廣く体胖かなり」と云ふことがあつたが、我々も心が廣く大きく成て、身軀もこせつかなく成るのである。夫と云ふのも、眞實の安心が判定ると、身の行末が判るからして、心に一つの覺悟が開け、新らしい見識が加はつて、物事を疑らなくなるのである。日蓮上人は、一生の間災難に計り出遇なされたから、御弟子や、信者方が、少しは愚痴をこぼしたと見ぬまして「天の加護なきを疑はざれ」と、御誠めになつた。物事を疑らないから煩悶ない、煩悶ないから苦みがない、苦みがないから「苦しい時の神頼み」と云ふやうな、現金主義、御利益主義の、賤い、陋い、乞食の様な信仰は起らない。「日蓮は幼より今生の祈りなし」現世の小さな災難や、没理漢に悪まれ位のことや、社会が自由にならないとか、病氣が全癒ないとか、金がないとか、美味が食へないとか云ふ様な、小さな事で佛様をいぢめないのは、日蓮上人の主義である、法華經の御教である、顯本法華宗の理想である。我々の信仰は、現金主義でない、御利益主義でない、夫だから佛様に向て、要求する所がない、人に向ても求むる所がない、佛様に向て求むる所は、たゞ、漠然と宜敷様にと頼む丈である、彼をあへして下さいの、此

をこうして下さいのと、一々注文するのではない、至て無欲な信仰である。無欲であるから、心は常に平らである、靜かである、穩かである、日蓮上人の「教主釋尊衣を以て覆ひ給ふ」と仰たことが、能く納得出来るのである。我々は佛様の懐の中に住居るのである、何を苦て悶くことがあらふか、此程安樂なことはあるまい、此程喜ばしきことはあるまい、日蓮上人も仰てある、「此程の悦びを笑へよかし」と、又た「後生に大益を得べければ大に悦ばし」と、至極同感である、我々は喜び勇て、此世を暮さねばならぬ、何に？、それは春我慢だど？、咄！、怪しからぬことを云ひ給ふな、春我慢か、肥我慢か、一度此の境涯に到て御覽なさい、蓋し思ひ半ばに過ることがあらう。さてこれから附録として、ズット昔の安心談を例に引きませぬ。

「諸の疑と悔とを断ち、身も意も泰然として、快く安穩なることを得たり、今日すなはち知りたり、我は眞に是れ佛の子なることを。」(譬喻品)

此は舍利弗尊者の安心話である。其次は「世尊導師は、つねに天人を安穩ならしめ給ふ、我等は記を聞て、心安く具足しぬ。」(勸持品)是は、釋尊が最愛の妻たる耶輸陀羅姫が、未來成佛の理由を聞て、漸く心が安心し、満足出来たと、佛様に申し上げた言はである。

以上、安心の話も種々致しましたが、未だ此に重大なことが残して居ります。夫は如何なる事柄かと云へば、

安心後の力

と云ふことでありまして。我々が安心を得れば、此に覺悟が開け、見識が新くなり、疑心がなくなり、平静になり、安樂になり、歡喜の心になります。事實でありませんが、更に其上に一層の力が出る様に思ひます。如何して力が出るかと云ふに、今迄信仰も安心もなかりし我々は、死に居る様なもので、何事に對しても力がなく、直に失敗し、直に狼狽へ、直に墮落し、直に苦み、直に悲むのであつた。然るに我々の信仰と、佛様の大悲と、一度び一致結合して、我々の大安心が決定するや否や、我々本来の面目たる正義心、良心、佛性は復活し來りて、歡喜の血潮、全身を廻る時は、熱出て、肉動き、骨立ちて、勇氣、元氣と云ふ力は、此に生ずるのである。此力は信仰力とも安心力とも云ふべきものであつて、非常なる忍耐性を帯びるのである。何事も能く耐へ忍ぶと云ふ安心力は、消極的と積極的と、二つの方面に向て運動する、而して安心の天命を全ふし、我々の人格をして佛近からしめるのである。然らば消極的安心とは何であるか、此は放棄することである。物事をアキラメルことである。人間の社會は思ふ様にはならぬ、儘にならぬはサイの目と、鴨河の水のみでない、幾ら正直に働いても、不幸のみ續きて貧乏は仲々止

まない、幾ら用心しても盜賊に入られる、ソラ地震だ、ソラ火事だと、災難が打ち續く時は、誰しも「天日様さこへませぬ」と云ひたくなる。けれども其處が辛抱の仕處なので、天を恨んでも、人を恨んでも仕方がないので、切齒かんでもだめなのである。此は一つ天運未だ運り來らざるものとアキラメ、前世よりの因縁約束ごと、アキラメ、今更返すか、貸すか、何れにしても未來の苦を抜く原因なるべしと思ひて、堪へ難き苦しみを耐へ忍で、心を静かに平かに保て行くを、消極的安心と云ふのである。或は又た、此身は何せ罪惡の深き者愚痴の者にて、現在に於ては如何とも仕様のなき身であつて無難にて立派な者に成うとしても成れないから、セメテは未來に於て助からんと云ふのを、アキラメ主義の信仰と云ふのである。然し、此のアキラメル、放棄することの出来るのも安心の力から來るので、今日の宗教的安心と云ふのは主に是である。

むことが出来るのである。「日蓮が弟子は臆病にては叶ふべからず」と云ひ、又た「詮ずるところは天も捨て給へ、諸難にもあへ、身命を期とせん」と、示めされた御精神は、實に積極的安心の、最も好き模範である。此の安心力を有て、弘通家とならば、如何なる人にか感化せざらん、この安心力を以て政治家と成らば、如何なる國か治らざらん、此安心力を以て教育家と成り、商業家と成り、工業家と成り農民と成り、軍人と成らば、如何なる國家をか興さざらん、如何なる社會をか開發せざらん。我々の期して求めんと欲する安心は是である、我々が社會の一員として暮して行くには、是非共此の安心は必要である、我々が人生の方針を決る、第一最初の條件であつて、又た最後迄の力である、怯懦怠慢なる我々をして、大勢力、大勇猛、大精進ならしむるものは、この積極的安心である、我々をして法華の修行を完成せしむるのも、我々をして佛知見を開かしむるのも、我々をして最後に常住の佛果を成就せしむるのも、この安心である。六ヶしき社會を、容易く暮させるものはこの安心力である。我々は何とかして此の穩當にして而かも勇健なる、積極的安心を得たいものであります。以上安心の話は此の位にしてをさます、南無妙法蓮華經

十、批判篇

1 總 要

佛教とは何ぞや

山根 顯 道

自分は現代の佛教徒と稱するものに對して、眞面目に斯様な問を試み、而して其答辯を聞きたいのである、それは何故かと云ふに、由來佛教とは本師釋迦牟尼世尊の所説の教法でなくてはならぬ筈なのに、佛教徒の多くは其本師たる釋迦牟尼世尊に對する考慮が、妙に他の方へ外れて居る様に思はれる否確かに外れて居る、是はせうもけしからん事で、佛教徒が墮落して居るの、佛教が振はないの、國家人生に何等裨益がないのと心配するよりも、先づ佛教徒の頭腦に抱持せる佛陀觀及び教法觀の正當なりや否、即ち當れりや若くは外れ居れるやを調査するのが、何よりも先決問題であらうと思ふ。阿彌陀を本尊とし大日を本尊とし、藥師觀音不動地藏其他所有佛菩薩を本尊とし中心として、教團を構成し宗義を云爲して居るものは、畢竟是れ惡魔の眷屬であつて、それ等の凡ては佛教でも何でもない、邪魔外道なりと論斷して毫も差問ないものである、何となれば佛とは、疑もなく釋迦牟尼世尊の御事、教とはその釋迦世尊の所説の教法であらねばならぬ、決して阿彌陀の教法だの大日の教法だのと云ふものが、現世界に存在すべき善のものであり、畢竟阿彌陀佛も大日如來も

其他凡ての佛菩薩の名號も、さては八萬四千の法語義門も、皆悉く釋尊一佛の梵音聲より説き出されたもので、若も釋迦世尊なかつせば、佛敎經典なるもの、今日に流傳すべき筈なく、隨て諸佛菩薩の名號も利益も何も角もあるべき筈はないのである。

然るにも係らず、現代の佛敎徒は此大切なる釋迦牟尼佛を度外視し若くは忘却し去りて、其本尊信念修行の總てが途徹も無い方面にのみ逸出して居る、所謂阿彌陀を偏崇し、大日を珍重がり、觀音さまのやさ姿が難有の、不動さんの火炎に囊まれたる姿勢が豪毅だのと、凡夫の獨斷を以て勝手氣儘の對境を構造して居る状態は、悉く是れ本佛釋尊に對する不禮の仕方て、横暴極まる反逆人である、不届千萬の師敵對であるそれで以てブー／＼敷も佛敎徒候とは呆れて物が言へないではないか、眞面目に評論せしむれば全く以て狂氣の沙汰としか受取れない、

佛とは何ぞや教とは何ぞや、斯く眞率に眞直な考慮を以て取調べて來て御覽なさい、成程と始めて本氣に立歸るべく、佛とは釋迦牟尼世尊の御事、教とはその釋尊の説せられたる教法と云ふ事に落居して、否でも正路に立戻るべき事と考へられる、

處が此研究着手の初一念が適順でなく、何でも關はんと云ふ主義で以て手當り次第に經文を多讀して、秩序なき研究をす

實相を隠して説かない假の御經、權方便施設の御經である、而して法華經は眞實究竟の御經で、最勝陀羅尼諸經の中の大王、阿彌陀經大日經等の法華經以外の一切の經教は悉く權方便の施設で、一名之を眷屬修多羅と云ふのである

て、此影の佛と方便の御經とは、完全なる指針の下に於て研究の材料、若くは實義光顯の助縁とするには子細ない様なもの、決して依憑としてはならぬ、それに身心を委ねてはならぬ、眞實依憑すべく尊崇すべきは本佛と實經とである、

『佛と經との二を明らむべき也』とは、此眞目を取違へぬ様との親切にもれる指南である、而して日蓮上人の此示誠は上人獨斷のお言葉では決してない、全くは

如來の滅後に於て、佛の所説の經の因縁及び次第を知て、義に隨て實の如く説かん (法華經神力品)

との佛陀の御聲を祖述せられたのである、佛の所説の經とは釋尊一代五十年廣説密説の經典則ち一切經の事で、その一代經には因縁と次第と云ふものがある、その次第順序も淺深勝劣も權實半滿も一切れ構ひなしと來た日には、佛敎ほど紛亂難然たるものは無い事になる、隨つて佛陀の方も本佛迹佛の眞目を無視したならば、秩序もなく統一もなき多神敎となり了るのである、佛敎本來の性質は決してそんなに散漫荒量の教法ではない、義に隨つて實の如く説けば秩序井然たる一大教法である、世界の光明である、人生の寶典である、

ると、それは經典が五千七千餘卷、佛陀も三千佛五千佛と云ふ程いろ／＼のだから、得てして阿彌陀の佛敎だの大日の佛敎だのと途徹もなき邪路に踏み迷ふて、墮在泥梨の業縁に縛せらるゝので、涅槃經に『佛法を學するものは十方の土の如く成佛の本懐を達するものは爪上の土の如し』と説かせられたのは、全く遺般の誡告である、てすから研究の初一步から餘程の細心注意を要すべき次第と心得ねばならぬ、日蓮上人は此事を左の如く仰せられてある、

凡そ佛法を信する人は、佛と經との二を明らむべき也、然るに當世の眉を組み鬚を並べて各我所立こそ實なれと諍へども、皆佛の御本意に背けり (法華大綱抄)

最も明確なる研究の指南と謂ふべき大文字ではあるまいか、『佛法を信する人は佛と經との二を明らむべき也』眞にそうである、佛敎徒と稱する以上は、少くとも佛の本迹と經の權實をば是非とも明らめなくてはならぬ譯だ、

開處で、佛陀の御身の上に本佛と迹佛との二種がある、本佛とは本體の御佛三世實在、本師釋迦牟尼世尊の御事、迹佛とは垂迹影現として化現の佛である、本佛の暫く姿を宿された影、赴化益物の應現である、彌陀藥師其他所有佛陀は悉く此迹佛であつて、一月萬影の譬は遺般の消息を説き得た妙喻である、それから經教の方に實教と權教の區分がある、實教とは天地法界の實相を顯説せられたる御經、權教とはその實體

悲ひ哉日蓮上人の統一主義を實の如く義に隨つて唱導せられたる以外、諸宗の祖師達は皆不義に隨つて不實の如く氣儘の宗旨を開いたのだから堪らない、隨つて一般佛敎徒と稱する人々は、一として佛陀觀及び教法觀の正鴻を得て居ない唯モ一間違に間違を重ね、誤謬に誤謬を積んで、紛々擾々底止する處を知らない現今の情態、佛敎とは何ぞやとの質問を提供して反正を促すのは當然の措置であらうと思ふ、

佛陀だから何の佛陀でも本尊として構はぬ様に考へて居るものは、恰かも國家の主權者だから、露國のツァールも阿米利加の大統領も何れだて同じだと思ふて、因縁深き大日本の皇室を輕視し奉り、外國の主權者に阿諛すると同前、言語道斷の國賊逆路伽耶佗の反逆人となるのである、

御經文だから何の御經だつて委細巨細があるものか、應病與藥だもの自分の氣に入つたものが第一だ、權實も大小も何ても構はない様に考へて居るものは、恰かも病人親らが醫師の藥局に飛び込んで、手當り次第に劇藥毒藥の嫌ひなく鶴呑にすると同斷で、その病患に効驗なきは勿論の事、悪くすると即座で寂滅往生、隨分共危險極まる無法の痴呆漢と云はなればならぬ、

眞率にして眞直なる考慮から餘執邪念を捨て、佛と經との二を明らむべく正格に歩み出した研究こそ、正當の求道と云ふべきであつて、さもなくて此活潑なる七千餘卷の佛敎經典

を開雲に手當り次第研究したからとて、どうして如實の信仰が得らるゝものか、全くの處骨折損の草臥まうけに終るのである、

華嚴真言禪念佛八宗九宗の依經と、而して其本尊とは、何れも皆その宗旨々々の祖師達が佛敎經典を分裂的に見て、勝手我立を骨張した割據的偏執の遺形であつて、決して佛世尊の御本意に契合して居ない、佛世尊の御本意は從淺至深の綱格によりて、擬宜し誘引し彈呵し陶法して、斯くて四十餘年未顯眞實の榜示を打ち、進んで要當說眞實の法華に入り、壽量顯本の最高敎義を説き、やがて歴史的の釋尊に即して敎義的釋尊を顯本し、應用暨に三世に高く利益横に十方に遍ねき三身即一應身常住の眞實義を示して、久遠本佛三世益物の大慈悲大智慧大作用の總てを此法華經に開闢し究盡せられてある、

されば我執法執のすべてを捨て去つて、眞率に法華經王の如來誠諦語に接觸して御覽なさい、浩瀚なる佛敎經典には整然たる秩序と一絲紊れざる脈絡があつて、統一の理義極めて明白に、佛陀の本迹の如きも、如實の志念に住して靜かに壽量品を再讀三讀したならば、何等疑義の殘存すべきものなく、味謙崇敬眞に歎稱措く能はざるに到るは必定である、

本團の統一主義を標榜して敎界に飛躍を試みしより茲に十數年、近來統一の熟語は敎界一般に慣用せられ、甲も乙も口を

開けば即ち統一を叫ぶに到つた、されど思へ、法華經に依據せざる統一は、如何に其聲を大にするも、敎義上何等の價直を認めざるのみならず、此娑婆世界に生れて娑婆世界に流傳せる釋迦系の佛敎經典を捧持する以上は、彌陀中心の統一だの大日中心の統一だのと云ふ、大膽極まる斷言は斷じて許すことは出来ない、須らく釋迦中心の統一法華經中心の統一を鼓吹すべきである、

繰り返して申しさするが、法華經は一代佛敎を開顯せる統一敎であつて、諸他の衆經は一時權施の方便敎である、日蓮上人は紛亂せる佛敎の統一を決行すべく如來使として、末法萬年救護の大導師として、有緣深厚の大日本に應現せられたる統一主義の聖師であつて、諸宗の祖師達は悉く以て、佛敎を分裂的割據的に解釋したる分裂主義の人達である、

分裂の見解は佛陀の本意に背馳せるものであるから、尅實して論ずれば佛敎とは名け得られない、邪論である曲説である隨つて分裂主義の導師は附佛法學佛法の外道である、佛弟子とも佛敎徒とも稱することは斷じて許されない、之に反して統一の見解は佛陀の本意であつて、義に隨つて實の如くに大法を宣傳する正統の佛敎徒である、淳善の地に住せる是眞佛子である、如來の衣を以て覆はるべき名譽の菩薩である、身に袈裟衣を纏ふから、手に念珠をつまぐるから、寺院に居住して居るから、檀那寺に宗藉を有して居るから、六金色の

旗を樹てるから、敎會の木票を幾個も門手に貼付するから、讀經が調子よく出来るから、佛壇に位牌を所持して居るから佛名を唱へ得るから、偈咒を誦するから、香華を手向ける作法を知て居るから、れ百度を踏んだ事があるから、巡禮回國をしたから、千ヶ寺往詣をしたからと云ふ様な事は、百萬陀羅並べ立てゝも、それで以て佛敎徒の資格を備へたと云ひ得られない、佛敎徒とは佛敎の眞實義を把住し憶念して、而も三業に經て隨義如實の行法を辿るものを呼ぶ稱號である、而して眞實の佛敎は、此眞實の佛敎徒と進退隆否を共にするのである、

(完)

### 對外警策

#### 十二、警策篇

古定賢正

積極的大法華經主義を奉ずる吾人敎徒の對外警策、久遠實成大恩敎主釋迦牟尼佛の御手にすがる吾人敎徒の對外警策、勇健豪邁にして至誠日月と光を輝ふ日蓮上人の敎義信條を信ずる吾人敎徒の對外警策、其を語ればなかく、長い、大法華經大釋尊、大日蓮、其經典の力、其人格の力を以て吾人は外に對しなければならぬ、外に對する吾人敎徒の任務、其はなかく、重い、今や佛敎界の有様は混沌たるものである、寺院の莊嚴、僧侶の學徳、其が盛大でないとは云ない、然し餘りピカピカし過ぎて却て安物の様に思はれて居はしないか近頃は山師的紳士といふ者が出来て金ブチの眼鏡や金グサリの時計をブラ下てそして指には金の指環を穿めてガラガラする風で走る者があるが、一寸見れば立派だが、其實裏面を洗つて見れば、イヤハヤ散々なものである、其と同じく今日の佛敎界がとかく活動するやふに見へ、又盛大の様に見へるのは其實山師的紳士のそれと餘り異つた點がない、裏を洗つて見れば實に散々な者である、吾人は今の佛敎界が今少しく眞面目に其敎風を刷新せむことを希望する、

### 聖

### 語

疑て云く人師は經論の心得を得て釋を作る者也然らば即ち宗々の人師面々各に敎門をしつらひ釋を作り義を立て證得菩提と志す何ぞ慮かるべきや然るに法華獨り勝るといはく心せばくこそ覺候へ答て曰く法華獨りいみじきと申すが心せばく候はく釋尊程心せばさ人は世に候はく何ぞ誤の甚しきや

(録、六三六)

日蓮は法華經を持つと云へども念佛を破す我等は念佛をも持ち法華經をも信じ戒をも持ちて一切の善を行すと等と云云此等は野兎が踏跡を隠す金鳥が頭を穴に入れ魯人が孔子を蔑如し善星が佛を怖せしに異ならず馬鹿迷ひ易く鷹鳩辨へ難き者なり慕なし慕なし

(録、六三九)

此を法華經の統一的意见から見ても今の佛敎の發展が果して

正しさものであるかどうか頗る怪しむべきことであらふと思ふ、何故に彼等の多くは其公平なる赤心を開いて、佛教を見ないのであらふ、眞宗浄土宗の一派は直に彌陀を中心として佛教を解釋せんとし、又其眞言の一派は大日を中心として佛教を解釋せんとしつゝある、是は甚だ誤見である、然し世間では之を除き重大なものに見て居ない、彌陀かどふであらふと、大日がどふであらふと、又釋迦がどふであらふと、彼等は宗教的意識を満足せしむるものであつたらよいといつて、何とも思つて居ない、是實に怪しからぬ沙汰である、然し唯怪しからぬといつても、そふいふものを却て笑ふ位のもので殆んど話にならない、吾人は佛教を解釋するには、法華經の見地を用ひ、又釋尊の名に於てし、そして日蓮上人の立教の方針に依據しなければならぬと信する一人である

日本の皇室を解釋し、大和民族の精神を解釋するには、古事記、萬葉集を以てし、そして神武天皇、菅原道眞を以てしなければ、とても完全な解釋は得ることが出来ない、それと同じく佛教に於ては、釋尊を離れて又法華經を離れて、解釋することはとても出来ない、英國の歴史や獨逸の歴史や支那の歴史では、とても大和民族を解釋出来ない、よし其が出来たに於ては、果して正しい結果が得ることが出来やふか、苟も常識を備へたものは此位の事は分る、今や彌陀の名を以て又大日の名を以て、そして觀經や大日經を以て佛教を解釋せ

ある

吾人本佛釋尊の教徒は、佛教に於ける主權者の確證を彼等に要迫せねばならぬ、然り彼等の潛上を叱咤し攻撃し、改めせしめなければならぬ、念佛無間、禪天魔、眞國亡國、律國賊の格言は彼等の眼を正す具體的宣言である、此を以て偏狹だ無學だと云つて嘲つて居るのは、とても天下の大事は話せない奴輩である、若國家が一朝世界主義に墮落して、自國の存在を知らなかつたならば其國は亡びる、日本國家は古事記を有し、萬葉集を有し、神武天皇を有し、菅原道眞を有して始めて國家が興隆する所以が根本的に判る、此に反して日本國家がナポレオンを崇拜し、民約論を有することを誇り、シエクスピアを尊び、マクベスを有することを誇つて居つたならば、日本の國家は疾く既に無いのである、古事記を有する事を誇り、神武天皇を有することを誇る、日本は偏狹であるか吾人は國家の特性を鼓吹することを決して偏狹と思はない、其と同じく今や佛教の特性を鼓吹する前提として、四大格言は唱出されたのである、吾人は日本が神武天皇を有することを誇ると同じく、佛教に釋尊を有することを誇りとす、又日本が菅原道眞を有することを誇ると同じく、佛教に日蓮上人を有することを誇りとす、吾人は日本に古事記や萬葉集があることを誇りとすると同じく、佛教に法華經あるを誇りとす、是は毫も偏狹でない、むしろ佛教の主權を尊重し、又特

んとするものは、自國の皇室及び國籍を他國の君主の名、及び他國の歴史や文學を以て解釋せむとするものである、是實に由々敷一大事である、國家に若斯の如き者があつたら、國家は此をどう處分するであらふ、屹度重き罪を犯したものとして處分するに違ひない、今斯の如き事實が佛教界にあつて而も此を責むるものがないとしたならばどふである、實に佛教の滅亡ではなるまいか、法華經を離れて、又釋尊や日蓮上人を離れて、佛教が尚存在するとしたならば、其は一國に獨立の精神なく、主權は疾く既に他國に移つて、國亡びて山河ありといふまでの事と殆んど擇ぶ處がない、主權の行使が出来ない國は最早滅亡した國である、是はあつても無いと同じである、今や佛教に法華經なく、釋尊なく、日蓮上人なくば是佛教に精神がない、所謂國に主權の行使がないと同じである、法華經釋尊及び日蓮上人は佛教の主權者である、此を認めることの出来ない佛教徒は、例へ其智者であつても徳者であつても、又どんなに勢力があつても、其は盲目者にあらざれば謀叛人である、開目といふことが御書の中に論じてあるが、是等の盲目者はどうしても開目者とならなければならぬ、又日本歴史上の謀叛人のことも論じてあるが、此等は一國の主權の主体を認めなかつた謀叛人であるが、佛教に於ては弘法や法然や、其他の有象無象の奴輩が、潛上にも佛教の主權者を認めなかつたといふことを、叫破せんとする前提で

性を發揮する所以である、大日や彌陀を以て佛教を解釋し得たりとして居るものは、自分の國を他國の君主の名で解釋して居るものである、吾人は今の佛教徒が活動して居ないといはぬ、然し其は暗中夢中の愚劣なる行動といはなければならぬ、彼等いまだ眞の自覺なし、然し彼等は早晚一大警聲に其耳を倚てなければならぬ、國に主權の發動なければ、其國は亡國である、然り、法華經と釋尊といふ主權のない佛教は、滅亡したる佛教である、滅亡したる佛教を抱いて群々たる生民に臨む、其感化が足りないのも無理のない事である、然し彼等は如何に無意識でも教民は早晚覺醒する、大臣や屬僚は他國の保護で其位置が安固だから、いつまでもと思ふても、其國の氣概あるものは時來り準備が出来れば、獨立の宣言をして主權の確證を迫ると同じく、今や佛教界の教民は、今一層心靈上の欲求が進んだなら、佛教信仰の根本依據を求めねば止ぬ、其時こそ彌陀佛教の滅亡期、大日佛教の滅亡期である、教民の心靈上の獨立は、今日の佛教を打破せざるには措かない、法華經の宗教的徳的威力、及び釋尊の佛教に於ける巨大な位置は、其時屹度燦爛たる光を放つに相違ない、國家主權の所在に向て忠誠を致して善良なる國民たるべし、佛教精神の所在に向て信仰して救済を受け、始めて佛教教民たるべし、法華經を知らざるものは佛教教民にあらず、釋尊

を知らざるものは佛教教民にあらず、彌陀佛教の徒よ、大日  
佛敎の徒よ、其他佛教を口にする徒よ、乞ふ一大猛省を事實  
の上に顯せ

### 日什上人置文諷誦章卷上

齡八十老比丘 坂本日桓 講述

其十九

其要法者所謂題目之五字是也 此の二句十三字の  
文は承前起後の文と申して前に有る文を承て然して後の文を  
起したる語て有ます、何となれば次上の文に「付末法弘通之  
要法」と有る文を承て「其要法者」と御書になつたから此の  
四字を承前の文と申します、倍起後の文と申すは下の「所謂  
題目等」と有る一句九字の語が、「然此妙法蓮華經者」と有る  
後の文を起したるが故に起後の文と申すので有ます、此の諷  
誦章の「其要法者」と云ふ文より去て「十界互具之大曼荼曼  
也」と云ふ迄の二百五十四字の文は法華經の本門の本尊を御  
講談遊ばされたる文て有ります、倍此の二百五十四字の文を  
分科して聞かせますが、先づ大に分つて四段て有ます、第一  
には「其要法者所謂題目之五字是也」と云ふ此の二句十三字  
の文は惣じて法の本尊と人の本尊との二の本尊を標示したる  
文て有ます、第二に「然此妙法蓮華經」と云ふ文より去て一是

此本尊之本体也」と云ふ迄の六句四十五字の文は別して法の  
本尊を釋し、第三に「次釋迦多寶二佛者」と云ふ文より去て  
「末法弘經之導師也」と云ふ迄の一百六十八字は別して人の本  
尊を釋し、第四に「凡此大曼荼羅者」と云ふ文より去て「十界  
互具之大曼荼羅也」と云ふ廿九字は上に釋したる法の本尊と  
人の本尊との二つを總じて結釋したる文て有ます、此は大段  
の分科て有る、其細かなる分文は隨文消釋の時に一々分けて  
聽せませう、倍此の諷誦章一部の内に題目の御講談が二ヶ所  
有りませう、今此の所の「所謂題目之五字是也」とある題目と  
此の後にある「次題目者界如三千之本名」とある題目とは文  
字雖一而義各異て少しく不同が有ます、然れども法華には毫  
も不同は有りませせん、今此の所に書き玉ひたる題目は本宗の  
吾人か不斷尊信禮拜し奉る所の本門の法の本尊の題目て有  
ます、後の「題目者界如三千之本名」と御書になつた題目は  
本宗の吾人が行住坐臥に信心口唱し奉る所の所修の題目て  
有ます、斯の如く吾人の所尊の法の本尊の題目と吾人の所修  
の信唱する所の題目との不同が有ます、其法華は俱に法華經  
本門壽量品所顯の事の一念三千神力品の結要妙法五字の題目  
にして毫も不同は有ませせん、故に此の所にては圓融三諦之法  
華と有り、後には界如三千之本名と御書になつて題目の法華  
の妙義を顯はして有ます、

### 然此妙法蓮華經者三諦圓融之法華性海果分

之内證萬行衆善之都名本地甚深之奧藏也 是此  
本尊之法華也 此六句四十五字は人法二の本尊の中の法  
の本尊を御講談遊ばされたる文て有ます、中に於て初の一句  
八字は法の本尊の法華を標示し、次に三諦圓融の下の四句廿九  
字は正しく標の文の法の本尊の法華を四段に分て讚歎賞美し  
て釋し、末の二句八字は都て上の文を結釋したので有ます、  
倍此の標の文の一句八字は上に於て辯じて聽せましたから略し  
ます○三諦圓融之法華文此の一句七字は本佛の釋尊所證の法  
を擧て讚歎したる文て有ます、三諦と申すは空諦假諦中諦を  
三諦と申します、三とは法の數を擧げ諦とは眞實不虛の義と  
て、此の空假中の三法は佛菩薩等が始て所造したる法にはあ  
らず、若し佛菩薩等の所造の法なれば終に破滅に歸すれば虛  
偽の法にして眞實不虛の法では有ませせん、此の三法は無始よ  
り本有と此世界にある天然常住の實法なるが故に諦と申すて  
有ます、次に圓とは圓滿圓足とて毫も缺減なきを圓と申し、  
融とは融通融即とて是れもまた相即融通して少しも缺減なき  
事て有ます、然れば圓融と申すは空諦の一法にも假中の二法  
が圓滿融即して備わり毫も缺減なく、假中の二諦も空諦の如  
く毫も缺減なく、三諦各々三諦を圓滿融即して缺減なき不可  
思議の法華が妙法蓮華經の題目であるて讚歎して釋したるが  
三諦圓融之法華と申すて有ます、是れは之れ今の純圓一實  
の法華經の三諦圓融の法華たる妙法を釋したるて有ます、華

嚴方等般若等の經々にも三諦圓融の法門を説くと雖ども、惜  
哉華嚴の如きは兼別の過があり、方等の如きは對三の不調法  
があり、般若の如きは帶二の越度があつて畢竟三諦隔歷の眞  
法にして實の三諦圓融の妙法では有ませせん、唯其當分に於て  
圓融妙法の名を貸し與へたるて有ます、如來一代聖敎の中に  
於ては跨節の三諦圓融の妙法を説きたるは法華經より外には  
龜毛角て有ます、此の法華に二經有り所謂法華述門經法華  
本門經法華迹門經に説きたる三諦圓融之法華と法華本門經に  
説きたる三諦圓融之法華と同席一坐の法華經と雖ども、其所  
説の法華に於ては其勝劣天地の如きの高下が有ます、法華述  
門經方便品の始成正覺の迹佛所説の妙理は單に甚深の妙理な  
れば劣り、法華本門經壽量品の久遠實成の本佛所證の妙理  
は甚深の上に甚遠の妙理なれば殊勝て有ます、理華すら一致  
にあらず迹劣本勝なり、況や事に於てをや、倍此の本佛の  
釋尊所證の甚深甚遠の三諦の妙理は無始事常住十界の事  
の内に無始已來事理の前後の差別なく同時に具備し得たる者  
て有ます、依て法華經本門に於て事理の二法を談する時は事  
理理徳と釋して十界の事華に三諦の妙理を具備すと申して有  
ます、徳は得なりと訓じて「うる」とよむ字て十界の事華に三  
諦の妙理を自然と得て有ると申すが事華理徳と申すて有ます  
法華文句の記の文の三の卷に理無所存遍存於事」と釋し  
たるは此の事て有ます、此の法華經の本迹二門の理の淺深の

法門は頗る廣博にして時に定期ある講席にて悉皆辯し得べき者にあらざれば略します、此の事を知らんと思は、日達上人の諷誦章注釋の下卷廿七丁より三十八丁に至る廣く辯釋して有ます、復た一致者流の著述の本述中正録にも辯して有ますから巻を編て御覽あれ、然れども二書ともに台家の所談にして理事迹の法門で、正し當家の事跡理徳の法義では有ません、其所は御注意申して置きます、事物理徳の當家の法義を知らんと欲せば吾が先師日受上人著述の台當違目篇等の書々閱讀せられよ、是れまでは理の三諦に約して辯して聽せられて有ます、更に宗義に依り事の三諦に約して辯する事は次々下の性海果分之内證の句に至つて辯解して聽せまます

報 載

宗 會 記 事

▲豫て報道したる如く本宗第五定期宗會は五月一日より同九日迄東京淺草新谷町慶印寺に於て開會せられたり本期宗會に於ける議事の成績左の如し  
 宗務廳提出原案 十、  
 第一號議案 宗制改正案 修正可決  
 第二號議案 總豫算案 修正可決  
 第三號議案 大學林建設費第三年度徵集免除法案 可決  
 第四號議案 三十八年度凶作地宗費寺數割免除法案 修正可決

- 第五號議案 管事の任期に關する法案 可決
  - 第六號議案 宗制改正案 可決
  - 第七號議案 宗費徵集年度變更法案 修正可決
  - 第八號議案 詮衡委員撰定法案 修正可決
  - 第九號議案 特別決議案 可決
  - 第十號議案 本山提出案 修正可決
- 議員提出案 一、  
 一 檀家信徒則中に入檀に關する規定を追加する件 可決  
 決 議 案 一、  
 一 教師等級變更に關し詮衡委員を設くるの件 可決  
 請願建議中會議に付したるもの 四、  
 一 妙法寺本堂建設の件 採擇  
 二 宗會議員日當増加の件 採擇  
 三 出征教師待遇の件 採擇  
 四 四千葉縣に支學林設置の件 採擇

以上の決議中變更及新設計の重なる事項は左の如し  
 教師の等級稱號及法服制を改革當時の制度に復舊す  
 千葉縣下に毎年一回大法會を執行する事  
 毎年一回宛東西兩部に講習會を開催する事  
 現金取扱人を廢止し現金は逓信省振替貯金となす事  
 等にして豫算は前年度と同額を徵集し、教學財團の件は本山信徒總代会の決議を俟つて協同盡力すること、なれり  
 ▲評議員撰舉 評議員任期満了に依り本月九日宗會議場に於て改撰左の諸氏當撰せられたり  
 横溝日葉 山根顯道 山岡會俊 鈴木障學 中村乾信  
 ▲頌徳表の捧呈 今回管長親下か著述せられたる法華經講義及聖語録を發刊せられたるの徳を頌し本宗宗會の決議を以て親下に頌徳表を捧呈したり其全文左の如し  
 頌 徳 表  
 宗會議長僧正清瀨真雄宗會議員一同ヲ代表シ度テ管長大

僧正本多日生上人親下ニ頌徳表ヲ奉ル 親下ハ夙ニ宗門ノ改革ニ盡碎セラレ教學ノ振起ヲ企圖セラレシコト一ニニシテ足ラズ殊ニ今回法華經講義及聖語録ヲ著述セラレテ中外ニ示シ玉フ此舉ヤ空前ノ淨業ニシテ亦人世救濟ノ大佛事タラズンバアラズ而シテ今亦教學財團ヲ設定シ宗門ノ基礎ヲ鞏固ナラシメントス凡ソ親下ノ爲シ玉フ所ノモノ終始一貫主義アリ經營アルモノニアラザルハナシ 親下ノ偉勳ハ獨リ宗門ニ止マズアラ實ニ佛敎界ノ爲メ其偉徳ヲ敬慕セズンバアラザル也嗚呼大ナル哉 親下其教篇々其徳高シ 親下ノ教義ト盛徳トハ實ニ未來際ニマデ流レテ盡キズ茲ニ宗會ノ決議ニ據リ別紙目録及頌徳表ヲ奉リ以テ感謝ノ意ヲ表ス  
 明治三十九年五月九日

▲會津妙法寺の本堂再建 同寺は我が開祖日什聖師の誕滅の靈場にして本宗特殊の靈利なるが維新の際兵燹に罹り堂宇悉皆烏有に歸し現時は殆ん見る影も無き有様にて從來屢再興の企ありしも未だ成效を見る能はざりしが今回坂本大僧正の住職となられし以來其再興及維持に焦慮せられ今回自ら五百圓を再建費中に寄附し檀家及宗内よりの寄附を得て再建せらるゝの計畫にて宗内の寄附勸募方法を宗會に建議せられたるものなるが宗會は滿場一致を以て同意を表し速に再建の成就せんことを希望したり宗會決議の内容は左の如し  
 妙法寺本堂建設の件  
 一 妙法寺本堂建設費は三千圓とす  
 内金五百圓は同寺住職に於て負擔す  
 金五百圓は同寺檀家の寄附に依る  
 金貳千圓は宗門全体の有志僧俗より之を勸募す  
 一 宗門の勸募方法  
 宗務廳監督の下に之を勸募する事  
 勸募の場合は管事布教師宗會議員は各教區の僧俗に對し熱心勸誘する事

但宗内の勸募は宗務廳に於て該寺住職及檀家の寄附の方法確實なるを認めたる後着手する事  
 ▲宗典刊行會 加藤文雅師の發起にて左の趣意書及規則を發表せられ近日第壹輯として戒体即身義の注釋を發刊せらるゝ等なりと聞く、吾人は本會の成立を喜ぶと同時に、立并三藏が十大論師の説を取つて成唯識論となしたるが如くに祖書各末疏中要を擧り繁を去り一祖書註として編輯せられんことの希望を有す  
 宗典刊行會趣意書  
 夫れ本化別頭の教學は八萬法藏の精華一代聖敎の肝心なり法華八軸の妙典は在世の極說にして 聖祖の御遺文一部は末代の法華經なり之を仰ぐに彌々高く之を鑽るに彌々堅く義旨幽遠にして信解易からず是れ則ち古徳先匠或は義を探り之を註し論釋蘭菊の美を競ふて其汗牛充棟も當ならざる所以なり吾輩曩に宗風の式微を慨し祖道の復興を計らんが爲め御遺文普及の大願を樹て四方有縁の贊助によりて僅に宿志を達するを得たり今や縮刷御遺文は獨り宗門縉素の手に捧持せられ讀誦解説の聲は之を隨所に聞くに至る誠にして宗家の盛事敎風扇揚の吉瑞なり只虞るゝ所は淺了異解の輩或は己見私議に任かせて寶珠を瓦礫となし一乘の妙道其流を亂さんことを是れ學に統なく傳に師なきの致す處信讀信解の士は以て直ちに其髓を穿つを得んも教相義判の學は師を待つにあらざれば知り難し遺文の註脚古より傳はるも『啓蒙』『扶老』『健抄』其他の書皆學者座右の寶典たり而かも此等の典籍或は版本共に滅し或は書あるも版既に絶へたるもの尠なからず偶々流布の書と雖も浩漭にして價甚だ廉ならず是れ一般篤學の士の憾とする所ならずや吾輩使ち御遺文の普及に繼ぐに各註釋論書の翻刻出版を企て及び 聖祖門下各教團碩學先徳の遺著を蒐集し其上梓を計り一は以て古典要書の湮滅埋沒を防ぎ一は以て學者鑽仰の便に供し



以て各教團合同統一の機運を速かならしめんと欲し茲に宗典刊行會を創立す本會第一期の事業としては先づ御遺文の集註を編纂出版し各教團先徳の遺著を公刊し次で建宗以降各部門に互れる教學必須の群典を網羅し逐次宗學全書の大を期す斯の如き趣旨を以て宗典刊行會は日宗新報創立十周年紀念として將た又た故社主銀堂居士が遺志を繼承し大に宗門教學界に報効する所あらんとし創立せられたるものなり仰ぎ願くは宗門内外篤學護法の縑素各位奮て吾輩が淨業を助成せられんことを

發起人代表 加藤 文雅 敬白

宗典刊行會規則

- 一、宗典刊行會は本化宗學に關する古來の著述を蒐輯して順次宗學全書を出版完成す
- 二、宗典刊行會は會員組織とし豫め會員を募り豫定數に充つるの後月刊分冊を以て宗學全書を配布す
- 三、會員は書冊代として金三圓を一ヶ月三期に分納すべし且つ入會の際は保證金一圓を納むるものとす此保證金は第一輯完成の際に於て冊子代に繰り替ふべし但し書冊代は一時に取極め前納するも可なり
- 四、會員にして半途に退會せんとするものは自己の繼續者を設くべし否らざれば保證金を返附せず
- 五、會員以外の購讀者には一部約三十五錢を以て願與す
- 六、本會に會長一名顧問若干名(各派の碩學を請す)會計監督一名會計一名編輯員若干名を置く
- 七、本會は之を日宗新報社に置く

▲京都通信 大法會 京都本宗總本山妙滿寺にては例

十四日 從軍所感

花のみやこ 紀野俊耀  
標準論 墨 照玄  
信徒の心得 吉田完亮  
閉會の辭 大橋日襲  
野口義禪

因に境内莊飾として講堂の前には高さ五間の五色の大吹貫をか、け四方に萬國國旗數百を飾り生花薄茶等の催しあり尙方丈には鳥津製作所より電燈十數箇を備へ各院席には瓦斯燈を數箇つゝ點したり

▲日露戰役戰病死者大追弔會 五日間の大法會中殊に十三日午後二時より全國戰病死者別して京都出身戰病死者の爲めに大追弔會を營む、管長本多大導師以下淨き三十名の僧侶が讀經、散華、行導につゞきて亮々たる音樂の響、盛裝せる二十人の天童の供花、野口本山部長以下の吊文吊辭、堂に充てる四百名の遺族、三百名の參拜者眞に目に涙をもたぬものはなかりき

式終りて直ちに本堂前鶴龜松の傍なる新に有志を以て建設せられたる高さ一丈五尺の日露戰役戰病死者紀念碑除幕式を行ひ遺族にはそれ／＼に供物を配ち施本を興へて散會せしは午後六時なりき尙當日は妙滿寺國光婦人會員は勿論、元報國婦人會員、及大和看護婦會看護婦數名派遣せられて萬端の事務に盡されしは殊勝の事にして感謝に絶へず

▲管長祝下御出發 本多大僧正祝下には大法會後十六日の本

年の如く四月十一日より五日間大導師として管長本多大僧正祝下及錦織前管長野口本山部長以下全國代表有志登山僧三十余名にて嚴肅なる大法要を修行し尙日露戰役戰病死者の爲めに毎日午後一時より特に音樂大法要を營み、三時説教三座、七時より演説數席を催し京都信徒を始めとし多くの地方信徒の登山者熱心に參拜聽聞せられたり、今登山僧及演題辯士人名を報道せば登山者には錦織大僧正、清瀬貞雄、田上寛靜、坪水日盛、萩原啓門、前田日應、能仁事一、西山日論、大橋日襲、日暮玄靜、中村休祐、山本容廣、久我默宗、吉田完亮、石井日證、高田日暢、勝山義道、溝口會旭、久松光道、門倉玄要、金阪乾受、墨照玄、紀野俊耀、武藤照惠、武藤麟、三好眞道、村瀬顯中、野口會英師等なりき

- 開會の辭 鈴木孝碩  
以信得入 久松光道  
九木橋 勝山義道  
法華行者の責任 日暮玄靜  
今正是其時 萩原啓門  
十二日 吾人の責任 武藤照惠  
日蓮聖人と人格の修養 紀野俊耀  
當著忍辱鏡 高田日暢  
確信の説 西山日論  
本尊の撰擇は信仰の根本義 能仁事一  
迷信撲滅 久我默宗  
平等ト差別 山本容廣  
佛教行門論 管長祝下  
餘興 筑紫琵琶 鳥山喜登子

山信徒總代會議を了へて十八日野口本山部長以下を隨へて姫路岡山地方へ巡回布教として御出發せられたり

▲本尊開眼式 本山院席法光院にては今度御佛改築に際して木像式本尊を文字式板本尊と改め去月八日其れが開眼式を行ひ住職鈴木孝碩師の開眼文並に米田政次郎氏の祝文ありて參詣者七十余名にして中々の盛大なりき、亦可慶(川崎生報)

▲岡山通信 四月二十一日岡山市本行寺に於て、先師第一義院日容上人の第十七年諱大法會を執行せり、是より先き姫路より岡山、吉ヶ原を巡錫せられたる本宗大學林長小林大僧正祝下は、二十日午後吉ヶ原本經寺主高田日暢師及び津山弘通所の林日法老師を隨へて來岡あり、二十一日午前には管長本多大僧正祝下は本山大法會を了り姫路、和氣御巡錫、和氣本成寺主山本容廣師を隨へて來岡せられ、寺主能仁事一師は此の大法要準備の爲め本山大法會を終へて直ちに歸岡し、津山よりは梶木日種師前日より參着せり、かくて當日午後一時より嚴肅なる大法要を營み、寺主能仁僧都の弔辭兩大僧正祝下の燒香、總代役員の燒香等あり、式了て小林大僧正祝下の説教あり、來會者三百有餘名頗る盛況なりき、同夜は七時半より公開演説を開く、師範學校を始め市内各學校の學生多數參聽し、聽衆滿堂、教益隆大、その演題等即ち次の如し

開會之辭 能仁事一師  
法華壇有妙 小林日玉師  
日蓮上人の信仰 本多日生師

同二十二日午後二時より同寺に於て日露戰役戰病死者追弔大法會を嚴修せり、この法會は這回の戰病死者に對する最終のものにて、來賓としては縣知事代理、在岡陸海將校下士官市長、愛國婦人會、新聞社員を始め遺族者八十餘名、式中管長祝下の誦讀文明朗讀、能仁寺主の追弔文明朗讀、縣知事の弔辭、の艦路聯隊區司令官大久保中佐の弔文明朗讀、縣知事の弔辭、追弔大法會幹事總代横山鐵太郎氏の追弔之辭、將校遺族の燒



募集一切 五月卅一日

同はる、同とり、山中きね、井澤きよ、同えん、田中さく、
立中、同因、寺信徒、同信袋壹個宛、關川仙之、吉田縫之助、同令

告示第四號 宗務總監 僧正 今成 乾 隨
告示第五號 宗務總監 僧正 今成 乾 隨
告示第六號 宗務總監 僧正 今成 乾 隨

同清五郎、同仲藏、富塚彌惣治、同三木藏、清水市太郎、同
同北田辰之助、同北田忠盛、同關又右衛門、同中野兵衛、同喜十郎

宗務總監 僧正 今成 乾 隨
宗務總監 僧正 今成 乾 隨
宗務總監 僧正 今成 乾 隨

宗務廳布達

告示第七號 宗内一般 本宗評議員任期満了ニ依リ改撰執行候處横溝日藥山根顯道鈴木贈學山岡會俊中村乾信ノ五名當撰各自承諾相成候條及告示候也  
明治三十九年五月廿五日 顯本法華宗宗務廳

告示第八號 宗内一般 第六教區宗會議員缺員ニ付補缺選舉執行之處小竹俊雄高點ヲ以テ當選承諾相成候條此段及告示候也  
明治三十九年五月二十五日 顯本法華宗宗務廳

(曩キニ管事へ通達ノ達書中告示第五號トアルヲ告示第六號ト改ム)

廣告

顯本要品頒布の儀

法華宗要品頒布の儀 既に五千部品切れに相成今回第六版相重ね候然る處印刷代製本費等時節柄にて騰貴に付無止左の通り改正候條其御積りに一切前金にて御申込有之度候  
追て品川妙蓮寺若くは統一團へ御申越の儀は手數甚だ迷惑に候條必ず左記の處へ御申込有之度候  
一 上製壹部金貳十錢(郵稅共)  
一 並製壹部金拾貳錢(郵稅共)  
但し何十部にても一切割引不致候  
淺草新谷町十四

慶印寺

統一團

本團へ送金に就ての大便利

本團は今度振替貯金の口座(口座番號二二一九番)に加入致しましたから本團に送金するに就ては爲替料も書留料も通信費もいらないて、最も確實に最も迅速に送金も通信も出来受取證も取れます、其方法は振替貯金の拂込用紙(本團より差出したる式紙に限る)に金額と拂込の年月日と拂込人の住所氏名を記入して最寄郵便局(何局でも取扱ひます)に差出しさへすれば本團に届きます、それに拂込通知票の裏面に通信文記載欄と云ふがありますからそこへ送金の目的を記入しますると何の爲めに送金せられたか直に分りますから別段に「けがき」の通知もなにもいりません、誠に元費がなくて安全なる方法であります、拂込用紙は「往復はがき」で御申越次第送付致します  
三十九年五月

文學博士 三宅雄次郎君序 (既製發賣)  
大僧正 本多日生師著

法華經講義 和裝紙入全八冊 洋裝背皮全二冊 正價金四圓 郵稅金二圓 臺清銀二十錢 郵稅金二圓

次 目 諸種の法華經觀 第一章緒言 第二章法華超勝の教義 第三章諸相の綱格 第四章天台の法華經觀 第五章法華經觀の大意 第六章法華經觀の特色 第七章法華經觀の意義 第八章法華經觀の地位 第九章法華經觀の發展 第十章法華經觀の未來 第十一章法華經觀の結論 第十二章法華經觀の總論 第十三章法華經觀の附論 第十四章法華經觀の跋

文學博士 姉崎正治君序 (既製發賣)  
大僧正 本多日生師編

聖語銀 洋裝九百拾錢 特製金壹圓拾錢 並製金七十五錢 郵稅金拾錢

次 目 第一發心篇 第二總要 第三總要 第四總要 第五總要 第六總要 第七總要 第八總要 第九總要 第十總要 第十一總要 第十二總要 第十三總要 第十四總要 第十五總要 第十六總要 第十七總要 第十八總要 第十九總要 第二十總要 第二十一總要 第二十二總要 第二十三總要 第二十四總要 第二十五總要 第二十六總要 第二十七總要 第二十八總要 第二十九總要 第三十總要 第三十一總要 第三十二總要 第三十三總要 第三十四總要 第三十五總要 第三十六總要 第三十七總要 第三十八總要 第三十九總要 第四十總要 第四十一總要 第四十二總要 第四十三總要 第四十四總要 第四十五總要 第四十六總要 第四十七總要 第四十八總要 第四十九總要 第五十總要 第五十一總要 第五十二總要 第五十三總要 第五十四總要 第五十五總要 第五十六總要 第五十七總要 第五十八總要 第五十九總要 第六十總要 第六十一總要 第六十二總要 第六十三總要 第六十四總要 第六十五總要 第六十六總要 第六十七總要 第六十八總要 第六十九總要 第七十總要 第七十一總要 第七十二總要 第七十三總要 第七十四總要 第七十五總要 第七十六總要 第七十七總要 第七十八總要 第七十九總要 第八十總要 第八十一總要 第八十二總要 第八十三總要 第八十四總要 第八十五總要 第八十六總要 第八十七總要 第八十八總要 第八十九總要 第九十總要 第九十一總要 第九十二總要 第九十三總要 第九十四總要 第九十五總要 第九十六總要 第九十七總要 第九十八總要 第九十九總要 第一百總要

發行所 大賣捌所

東京市淺草區南橋馬町須原屋 東京市淺草區南橋馬町泰文社 東京市淺草區廣小路淺倉屋書店 東京市淺草區廣小路森江書店 東京市淺草區南橋馬町須原屋 東京市淺草區南橋馬町泰文社 東京市淺草區廣小路淺倉屋書店 東京市淺草區廣小路森江書店 東京市淺草區南橋馬町須原屋 東京市淺草區南橋馬町泰文社 東京市淺草區廣小路淺倉屋書店 東京市淺草區廣小路森江書店

法華經講義 法華經の實相を究明し、佛の眞意を知らんと欲せば必ず法華經に來るべき也、古の法華經觀を網羅し、特に天台と日蓮との創見を發揮して、實に佛敎研究の上に現代及將來の光明たらん矣

聖語銀 法華は佛敎の綜合歸一を宣し、聖祖は各宗の積極統一を唱へたるもの、その教義の深遠に、且多方面にして、眞意を正明に會得し難きは、實に宗の内外に於ける古今の嘆聲なりき。本書は法華の三部及祖書全集に就て、之を整然たる組織の下に類聚編成せられたるもの、研究の士も、布教者も、信徒も必ず一讀すべき日宗の聖典なり

新發明

大急の出るより  
 本舖七回美珠堂製

- 將校軍人 ● 教師 ● 演說家
- 僧侶 ● 作曲家 ● 謠曲家

定價 金十錢 二十錢 五十錢 壹圓

右定價廿錢以上へは極て美麗なる丸樂入及揚技入兼用の物封入進呈仕候

● 各地有名の藥店にあり若し賣切の節は直接御注文被下度全國内は無選送料

東京兩國米澤町

本舖 吉田萬珠堂製

(印目堂法三)



● 木佛具木像厨子大販賣

佛書表具の元祖  
 各宗御寺院御入用品一切阿にても多少に不限御注文仰付らるべし佛書は申すに不及御宵像畫專門

小包例附三法堂諸品發賣目錄(正價付)  
 注意 佛書佛具佛像位牌木魚其種類品有之候を以て一々記致置候に付御入用の諸君は郵券四錢正價附發賣目錄書を作製呈仕候此の目錄御用ならぬ安價にて買はれ早くと御覽あれ何程遠方でも座ながら安價にて買はれ早くと御覽あれ其の正札附の品は左の通り  
 ● 佛書 一切 佛具 過去帳の類 ● 大般若經 ● 一切藏經 ● 理趣分位牌 ● 珠數 ● 大傘 ● 扇子 ● 中啓 ● 雪洞 ● 錦 ● 木魚 ● 拂子 ● 曲錄和幡 ● 唐幡 ● 人天蓋 ● 懸盤 ● 樂器類 ● 施餓鬼幡 ● 幡 ● 木像厨子 ● 木華 ● 經機 ● 茶臺 ● 香爐 ● 香盤 ● 香器 ● 三寶膳並に碗平子 ● 匙箸 ● 袈裟 ● 文庫 ● 靈具 ● 膳碗 ● 行鉢 ● 應量器 ● 自鉢 ● 水板 ● 盛物臺 ● 高皿 ● 袈裟 ● 文庫 ● 靈具 ● 膳碗 ● 行鉢 ● 應量器 ● 自鉢 ● 水板 ● 盛物臺 ● 物座ながら自由自在 ● 靈具 ● 膳碗 ● 行鉢 ● 應量器 ● 自鉢 ● 水板 ● 盛物臺

改姓廣告

復姓 原田 元 山本容廣  
 備前和氣本成寺住職

一本誌は毎月一回十五日を以て發行期日とす  
 一本誌は一冊六錢、十二冊前金六十五錢、郵券代用は一割増但五風切手を可とす  
 一 購讀申込の節は住所姓名を附録にて認めらるべし  
 一 本誌代金拂込は振替貯金に依らるゝ最、便利とす、拂込用紙は「姓復はかき」にて御申越次第送付すべし

一頁半	四角二頁	特別廣告
拾圓六圓	三四五拾錢	十五圓ヨリ
		廿五圓マナ

明治卅九年五月十五日印刷發行

發行所 井村 尚也  
 編輯人 山根 顯道  
 印刷所 鈴木 暉學  
 北澤活版所

發行所 統一團  
 東京市淺草區南松山町四十五番地

腦脊髓 帝國腦病院

東京市神田區和泉町 (電話下谷 七二七)

院長ドクトル齋藤紀一明治卅三年専門學研究の爲め獨逸へ留學卅六年同大學卒業業尙進て英佛専門病院を視察兩院にて診察す

精神病専門 青山病院

東京市青山南町 (電話新橋三六四五)

本郷 眞泉病院

(電話下谷四三九)

婦人科産科 醫學博士 千葉稔次郎  
 醫學士 中島 襄吉  
 醫學博士 野村 華造



### 本誌の特色

本誌は全國鐵道の停車場に備置  
さあれば其廣告は全國の公衆一  
般に知らるゝ便宜あり